**№1　テーマ『愛の力』**

**講話日2001年11月19日**

**司会：これより月曜集合研修のほうを始めます。お願いします。**

**一同：お願いします。**

**司会：着席。それでは、これ、４回目になりますが、芳村思風先生のほうからお話を伺いたいと思います。今回は前回の続きというかたちで話のほう、お願いしたいと思います。それでは先生、よろしくお願いいたします。**

**芳村：皆さん、こんにちは。**

**一同：こんにちは。**

**芳村：本当、すごい立派な本社、完成されまして、おめでとうございます。本当に今日、入ってきたのも、宮殿に入ってきたんかなみたいな感じで、会社というよりもリゾートホテルにでも泊まりに来たみたいな感じの雰囲気で、また皆さん方の、立ち居振る舞いというか、お顔なんか拝見してたら、社屋がこんだけ立派になると、皆さん方のご人格というか、品格も素晴らしくなってきたみたいな感じで、非常に爽やかな感じがしました。よくその地位が人をつくるという話もありますが、やっぱり、家が人をつくるっちゅうようなこともやっぱりあるんですよね。そういういい家に住むと、その家の品格に自分が合ってきたりして、自分が成長するというようなこともあるんじゃないかと思いますので、ぜひ皆さん方も本社だけじゃなくって、皆さん方、関わられるその建物も、どんどんよい品質の品格のある建物をつくってもらって、その家の中に住む人たちの品格がどんどん向上していくような、そういう、精神性のある建物がどんどんできてきたら素晴らしいなと思っております。**

**前回から、愛の話をさせてもらいまして、今日はそのパート２ということでお話をさせてもらいたいと思うんですけども、とにかくこれからのこの時代というのは、画一性から個性へという、そういう大きな価値観の転換というものがなされていきますので、これまでみたいに、この考え方が違うから、立場が違うから、感じ方が違うから、対立をするという、そういうふうな、この状況になってしまうんじゃなくって、違うから、だから学び合えるんだと。違うから、教え合えるんだ。違うから、助け合えるんだ。違うから、協力できるんだという、そういう違いということによって対立してしまうんじゃなくって、違うから、互いに協力できるという、そういうこの価値観の転換を自分自身の意識において果たしていかなければならないと思うんですよね。そうなったら、随分といろんな人間関係なり、いろんな仕事の中でですね、プラスの効果が随分、出てくると思いますので、そういう、違うから助け合えるという精神も、これもやっぱり愛の精神なんですよね。ぜひ、そういうふうなことをですね、考えてもらって、人間もやっぱり、量から質へとこれから転換していきますので、どんどん自分自身の人間性の質の向上みたいなことをですね、意識しながら、頑張ってみてもらいたいと思います。**

**前回は、愛の実力をつくっていくということの中でも、よい人間関係をつくる実力ということをテーマにしてお話をさせていただいたんですけども、だけど、本当に愛の力というものを、理性能力に上回る、理性能力を上回る問題解決能力を持った実力たらしめて、愛の力で生きていくということができるような、そういう理屈を越えた能力を持って人生や仕事をしていくことができるような、そういう、人間になろうと思ったら、単によい人間関係をつくる実力だけじゃなくって、悪くなってしまった人間関係を元のよい人間関係に修復するというふうな、それほど高度な、やはり愛の力を持たないと、この現実、いろんな問題をさばききって、そして生き抜いていくということは難しいと思います。**

**やはり、人間関係、さまざまな人間関係がありますから、いろんな対立や、嫌な思いや、人間関係で多いとむかつくっちゅうような感じに、なってくるようなこともありますからね、それをどう乗り越えていったらよいのかということは、非常にこれは人生の大問題で、ただ職場だけの問題じゃなくって、やはり家庭の問題とか、さまざまな社会での人間関係もそうですし、親御さまとのあいだのお付き合いもそうだと思うんですけど、とにかくその、悪くなってしまった人間関係を修復するほどの力を持たないと、理性によってつくりだされるさまざまな対立とか問題というものを自分自身が乗り越えていく力というものを持てないと思います。とにかく愛の実力はなんで必要なのかといったら、理屈によってつくりだされる問題というものは、理屈によっては、理性によっては解決し難い。だから、理性によってつくりだされる問題を乗り越えていこうと思ったならば、あとは理屈を越えた力である、愛の力を成長させていくっきゃないというね。そういう状況に今、世界はあるわけであります。で、人間関係でも、責め合うんじゃない。許し合って生きていこうというね、そういう精神を根底にしなければ、本当に平和な社会も、組織も、家庭もできませんから、その意味で、ぜひ愛の力の育成、成長ということを、ぜひ考えてみてもらいたいと思います。**

**とにかく、これまでは、愛の重要性そのものはみんなわかっているんですけども、だけども、年齢が進むにしたがって、どんどん、どんどん、愛の力が増していくというふうなですね、そういうふうな、この教育システムを人類はまだ持ったことがないし、またそれぞれの人間においても、自分の愛の実力を成長させていこうという意識にあまりなったことがなくって、愛というのはなんとなく、自然に出てくるもんだみたいな、そういう感じで受け止めておったことが多かったんじゃないかと思うんですね。だけども、前回お話をしたように、愛は努力だと。愛があるかどうかは、相手のために努力できるかどうかによって決まるんだ。相手のために努力できないということは愛がなくなってしまったんだということを、考えてもらって、愛は努力だ。どういう努力をすれば愛は成長するのか。そのことを、ぜひ考えてみてもらいたいと思います。**

**お父さん、お母さんが子どもを愛するというのは、お父さん、お母さんがどれだけ自己犠牲的な努力を払って、子どものためにいろいろ努力したか、やったかというのが親の愛ですからね。だから、すべての人間関係における愛というのは、やはり相手のためにどれだけ自己犠牲的な努力ができるか。それによって、相手に対してどの程度の愛を持っているかということが、決まるわけですよね。これは愛といったって、単に男女の愛という問題だけじゃなくってですね、あらゆる人間関係を結び付ける力が愛ですから、相手のためにどの程度の自己犠牲的な努力を、自分が本音で、本気で果たせるのかという、その本音・本気の部分が愛なんですからね。無理して努力して、嫌々ながらわざとらしくやっているというんじゃ、これは愛じゃないんですよね。相手のために喜んでというか、心から本音で、本気で自己犠牲的な努力ができるというところに愛の本質があるわけなので、そういう気持ちで、お客さんにも対応し、また、この社員同士でも、お互いにやっぱり、プロとして仕事をしていくということは、単にお客さんに喜んでもらったらいいというだけじゃなくて、一緒に仕事をしてる仲間にも喜んでもらえるような、そういう仕事の仕方ができる自分になろうというのが、やっぱり愛ですからね。これは仕事における愛の精神であります。ぜひ、そういう意味で、この愛の力の育成ということが、これから仕事の上でも、いろんな面でものすごく大事なことになるんだということを、考えてもらって、話を聞いてもらいたいと思います。**

**前回は、よい人間関係をつくる実力ということで、その中で５項目を話させてもらったんですね。よい人間関係をつくるためには、一番最初には、人間への深い理解というのを持ってないといかん。人間の深い理解というのはなんなのかといったら、人間はどんな人間でも愛されたい、認めてもらいたい、わかってもらいたいという気持ちを持っておる。その愛されたい、認めてもらいたい、わかってもらいたいという気持ちにさえ応えてあげるならば、どんな人間とでも仲よくなれる。仲よくなれない人間なんていないんだ。それが、よい人間関係をつくる、まず出発点における土台の原理であります。その次にね、大事なのは、謙虚な理性である。あまりにも今日は、理性的に傲慢過ぎて、相手の考えをなかなか認められない。自分と違った考えを排除する。それでは自分が成長できない。やっぱり、自分と違った考え方や感じ方や立場の人間と、自分が何かしら、付き合うことによって、相手から自分にないものを学ぼうとする姿勢がなかったら、人間は成長しませんからね。自分にないものを相手から学ぼうということが愛なんですよね。それが自分を成長させる原理であります。だから、異なるものを嫌だと思うんじゃなくって、この違うということに対して、興味や関心や好奇心や認識欲を持って、なんでそういう考え方ができるんだろう、俺は知りたいという、そういう異なるものに興味を持って、自分と違うものから何か１つでも学んでいこうという、そういう気持ちが愛なんですよね。それがよい人間関係をつくるわけであります。**

**それから、３番目のよい人間関係をつくる原理は、人間に完全性を求めてはならない。ついつい、相手を批判し、相手の欠点を指摘して、相手を注意して、それはいかにも、相手を成長させてあげるように思いますけど、やっぱり、注意されたり、批判されたりするほうは、なんとなく、嫌な感じがしますからね。うっかりすると、それが労働意欲をそいでしまうような結果になりやすい。どんな人間でも、やっぱり、短所はあって、長所もあるけど、短所もあって、短所があって人間なんだと。だから、その短所をあげつらうよりは、長所を褒めて、豚もおだてりゃ木に登るというような感じで、やっぱり、おだてられるというか、褒められると、なんとなくやる気になったりして、甘やかしになっちゃ駄目ですけども、だけども、やっぱり、褒めることが第1原則で、そして、その次に注意をするという順序が、やっぱり、大事じゃないかなと思いますね。**

**ですから、上司の方々は、部下の方々に対して、あまり注意をしたり、批判したりばっかりしとったら、やっぱり駄目なんですよね。会社に出てきたら、何かしら、ある程度、仕事はしてくれてるんですから、だから、どんなに仕事をしてないように見えても、あるいは欠点があるように見えても、まずとにかくは、いや、頑張ってくれてるね。ありがとうねって言ってから、だけど、ここのところ、もうちょっとこうしてくれるとうれしいんだけどなって言うと、こうやってくれるんですけどね。一番最初に、ありがとうねとか、頑張ってくれてるねって、こう言わないで、最初からここどうしたんや、ここ駄目やないかと言ってしまうと、なんとなくむかついてきたりして、もうやるかなんてなことになってきたりして、かえって、マイナスになってきたりするようなこともありますからね。**

**だけど、今の方々は、あんまりにも、甘やかされ過ぎてる人が多いので、叱ってもらうと、かえって元気が出るという方もいらっしゃったりして、かえって、褒められるより、厳しくされたほうが気持ちがいいというような方も、いらっしゃいますので、それはまたそれで、その人なりの対応の仕方をせんといかんと思うんですけども。とにかく基本は、やっぱり、長所を褒めて、短所はもう誰にでもあるんだから、とにかくこの長所で頑張ってもらおうと。短所の部分は誰かに助けてもらって、そして、助けてくれた人に感謝をするという、愛を持って対応しようという、そういうふうなことも、考えなきゃならんことなんですね。自分に短所があるから、それを助けてもらえるので、相手に感謝ができるんですね。感謝し合いながら仕事をしていくというのは、パートナーシップという、これからの仕事の仕方の非常に大事な、人間関係の構造であります。**

**そんなことも、それぞれ皆さん方が、仕事をなさる場合、自分自身でいろいろ工夫されて、仕事がスムーズにいくように、こう考えていかれたらいいと思うんですね。とにかく人間は、短所があってこそ人間。短所の存在が人間に謙虚な人間らしい心をつくってくれる。だけども、謙虚さだけじゃ、これはどうしようもない。一番大事なのは、長所を伸ばして、存在感のある能力をつくって、俺はこれで生きていくんだっていうね、そういう何かしら、実力というものを早く自分が持つこと。他人から一目置かれるような、そういう力をね、早く自分が持つ。そのことによって社会に役立っていくというのが、まず生きる基本ですからね。だけど、そればっかじゃ、やっぱりこれ、傲慢になってしまうので、そのためにやっぱり謙虚さが大事で、素晴らしい能力を持ってる人間が謙虚にすると、あんなすごいのになんて謙虚な方なんでしょうって、尊敬されるんですけども、強くない人間や自信のない人間や能力のない人間が謙虚にすると、なんとなくこびへつらってるような感じになってしまうんですよね。力がないと謙虚な人も価値が出ない。**

**その意味で、人間に完全性を求めることは、人間に人間ではないものになれって言ってることなんですけども、だけども、謙虚さよりもっと大事なのは長所を伸ばすことなんですね。長所を伸ばして存在感のある人間になる。存在感のある能力を持った人間になることが、とにかくこの世を生き抜いていく根本の力である。それと裏と表に付いていなけりゃならないのは謙虚さだ。その意味で、この人から愛されるためには謙虚さが大事なんですね。どんな美人でもね、傲慢になったらもう、これは絶対、嫌われますしね、愛されませんよね。だけど、顔は少々駄目でもね、謙虚であったら愛されるんですよ。この長所、いいところというのは、これは好きになってもらったり、憧れられる対象なんですけど、愛の対象は短所なんですね。だけど、俺の短所はここやと言ってって愛されるんじゃなくって、自分の短所はここだということがわかっておることによって、出てくるこのにじみ出るような謙虚さというものがあるとね、そうすると、すごくこれはかわいくなってきて、愛の対象になっていくんですね。**

**短所があるから愛される。長所は憧れの対象である。だから、前回話したように、恋をすると、相手を理想化するんですよね。どこが好きなんやって言ったら、もう全部好きということになってしまうんですけど、それは短所が見えないからね、全部好きになって、あばたもえくぼという状態で、恋をして、すごい素晴らしい人やと思って結婚するんですよね。だけど、結婚してしばらくすると、その恋しい、恋しいと思ってると、相手を理想化するんですけども、恋しい、恋しいって心情は、これは離れとるからね、出てくる心情なんですよね。一緒に生活し始めると、離れていないもんですから、恋しい、恋しいという恋の心情がなくなってくるもんですから、相手を理想化する心情もだんだんしぼんでくる。だんだん相手を理想化する心情がしぼんでくると、相手の短所がだんだん目立ち始めてしまって、日を追うごとに嫌なところばっかり見えてきたりして、なんでこんなのと結婚したんだろうと思ってしまうんですけども。だけど、そのことによって、本当の相手が見えてくるわけですよね。**

**人間というのはどんな人間でも、やっぱり長所もあるけど、短所もあるんやなということになってくるわけですね。そういう長所もあり、短所もある人間と、どう一緒に生きていくかというのが人生だ。それが結婚生活だということになってきて、人間を愛するということは、不完全な存在を愛することなんだ。人間はみんな不完全であって、どんな人間でも、自分の気に入らんところを、半分は持っておる。どんな人間でも、自分の気に入らんところを、半分持っとる。それが人間というもんだと。人は皆、長所半分、短所半分だ。短所が半分ない人間はいない。そのことがちゃんとわかってくると、どんな人とでもちゃんと仲よくなっていけるって力がどんどん、どんどん、成長してくるんですけど、もう全部、俺好みにならんと嫌や、全部、自分の気に入るようになってくれんと嫌やと思ったら、もう文句言いっぱなしでね、もう本当に文句たらたらの人生になってしまう。それじゃ、やっぱり、なかなか人間関係はうまくいきませんからね。ですから、やっぱり、基本的に人間というのは、どんな人間でも、自分の気に入らんところを半分持っておって、それが人間というもんだという、そういう人間に完全性を求めないような人間認識というものがないと、よい人間関係はつくれない。**

**４番目に大事なことは、今までとにかく勝たないかん。負けとったらいかんやないかというので、勝たないかんということばっかりやってきたんですけども、もちろん、戦ったら勝たなきゃならない。戦って負けとったらいかん。だけども、戦って勝つという、価値観よりね、もっと素晴らしい価値観が人間にはあるということを見いださないといかんような時代になってきたと。勝つことよりもっと素晴らしいことは力を合わせることである。勝つことよりも力を合わせることに、人間としての大きな喜びと価値を感じる感性というものが、今、人間に要求され始めた。それが愛だ。勝って負けるものをつくるというのは、まだこれは競争の段階ですよね。これからは、社会は勝ち負けを争って、負けた者をつくってしまって、そして、その勝った、勝ったと言って喜んでるという、そういう低レベルの人間性ではもうやっていけないという状況になってきた。戦ったら勝たないかんけども、戦ったら勝てる力を、使って、その力を合わせていくという、そういう共生の精神という、共に生きるという、そういう精神に成長していかなければならないというのが、今の時代の要請なんですよね。**

**ですから、勝つ人間よりも、戦って勝つことができる力を持った人間よりも、力を合わせるということに、能力を発揮できる人間が、今、求められておるという、そういう段階になってきておるわけであります。その力を合わせるという、能力を磨いていくということが、愛の実力の成長になるわけですね。どうすれば、違った考えや、違った感じ方や、違った立場の人間と力を合わせて、共に意義ということができるのか。それがこれからの社会の実力ということにもなってくるわけであります。違う考え方や、違った立場や、違う感じ方を嫌やなと思っておる段階は、もうそれは古い過去の、低い段階の人間性というように、言われるような、そういう状況であります。どうすれば異なる者と力を合わせて、共に生きていくということができるのか。その能力をつくっていかなければならない。それがまた愛なんですね。**

**一番最後に申し上げたのはユーモアのセンスですね。ユーモアというのは、人間関係の潤滑油というように言われるもので、単に笑わせるということがユーモアじゃなくって、何かしら人間の心をプラスの方向に、明るい方向に、不安から安心へ、あるいは絶望から希望へという、そういう方向性に、人間の心をいざなっていく力が、ユーモアの力ブラックユーモアというのはその反対で、人間を不安に陥れたり、悲しいとか、恐怖に陥れるというのが、ブラックユーモアで、その反対は人間の勇気や希望や喜びや笑いや安心やというものを与えていくのがユーモアの精神で、そういうユーモアの精神を持って、人と関わることができる。絶望の中にいる人間に希望を与えたり、不安におののいてる人間に対して、安心を与えていったり、そういうふうなことができるっていうのが、ユーモアの力なんですね。それもやっぱり、愛の精神で、そういうものを、教わらせていくということもしなきゃならない。以上５項目が、よい人間関係をつくる実力として必要だということでですね、お話をした内容でありました。**

**ちょっと、前回は悪化した人間関係を修復する実力の話にちょっと入って終わってしまったんですけども、悪くなってしまった人間関係を元のよい人間関係に修復するという、より高度な愛の実力っていうものの出発点はいったいなんだったのか。これは前回話させてもらったことですけども、第１番目には、悪くなってしまった人間関係をよい人間関係に修復しようと思ったら、まず最初は、何が大事なのかっていったら、悪い人間関係っちゅうのは、相手を嫌いになってしまってる状態ですからね。だから、それを修復しようと思ったら、例え嫌いな人でも好きになれるような力を、つくっていかないと、悪化した人間関係を修復できない。だから、基本的には、どんな人でも好きになれる実力というのは、どうしたらできるのかということを考えなければならない。だけど、どんな人でも好きになるというようなことは、現実には、人間そのものが不完全なんだから、これは絶対できない。だけども、少しでも、より多くの人をね、好きになることができるに越したことはない。そうなれば、どんだけでも、仕事がやりやすくなっていくし、いろんな人間関係の上で、自分が人の役に立ってあげるというか、社会の中での嫌なものをどんどん少なくしていくような、そういう力を持つことができるわけですから、少しでもより多くの人のことを好きになる力というのをつくっていくことは、これは人生の宝ですよね。**

**やっぱり、仕事というのは、人間関係、いわゆる人脈いかんで決まるわけですからね。どれだけ自分がたくさんのお客さんを獲得するかというのは、それは相手を好きになることができることによって、それができるのでね。嫌いな人間が増えてきたら、これはお客さんを拡大することはできませんからね。ですから、より多くの人が好きになれるという力が、営業力の根本であります。どんな人でも好きになり、どんな人をも尊敬でき、どんな人にも感謝できる。そういうふうな気持ちが出てくれば、ますます自分も成長するけども、仕事もますます、盛大になっていくということになりますよね。ですから、少しでも、より広い深い人脈をつくっていこうと思ったならば、やっぱり、どんな人でも好きになれる力、どうしたらできるのかということを考えることは、大事なこれは努力目標であります。**

**どんな人でも好きになろうと思ったら、どうするかといったら、どんな人間でも、長所、短所があるので、短所を見始めたら、もう絶対、好きになれん。だから、相手の長所を見て、相手の長所と付き合うという能力をつくっていかなければならない。だけど、悪い人間関係の中では、こんなやつに長所なんかあるかって、こう言ってしまいそうな、そういう状態が悪化した人間関係ですからね。だけど、その中で一番大事なのは、どんなに長所がないように見える人間にも、本当は半分は長所なんだと。長所と短所は半分ずつあって、半分も長所があるんだ。どんな人間でも、半分も長所を持ってるんだ。半分も持ってる長所は、俺に見えんということは、相手の責任じゃなくって、俺の人間性の狭さであり、俺の人間性の未熟さが、相手の長所が見えないという状況になってるんだと。そういうふうに考えることによってしか、自分は成長しませんよね。人を責める気持ちがある分だけ、自分は成長できない。相手のいいところを見いだす力を、つくっていくということが、人間関係において成長することですからね。ですから、相手の長所が見えないということは、自分に問題があるんだということを、まず考える必要があると思います。もうとにかく短所を見始めたら、好きになれんと。相手の長所をできるだけたくさん発見できる力がね、やっぱり、よい人間関係もつくっていくし、また悪くなってしまった人間関係を元のよい人間関係にだんだん引き戻していくということをするためには、相手の中にどれだけたくさんのよいところを見いだすことができるかということに掛かってるわけですからね。**

**それは原則的にはそうなんですけど、じゃあ、実践的にはどうするんだということですね。嫌なやつやなと思ってる、そういう人間関係とか、本当に悪くなってしまった人間関係というものを、修復しようという、そういうことを実践的にしようと思ったらどうするかということですね。まず人間関係の修復はどこから始まるのかというと、声を掛けるというところから始まるんですね。声を掛けるということは、これは心の橋を渡す実践行為なんですね。声を掛けなければ、これは絶対、人間関係は修復できません。ですから、まずは、嫌な人に対してでも、むかつく人に対してでも、もう本当に、もう顔を見るのも嫌で、避けて通りたいような人間にでも、本当にこの人とは仲たがいの状態で置いておきたくないんだ。なんとか関係を修復したいということを本当に強く願うならばね、どうするかっていったら、これ、まずは自分から相手に対して勇気を持って声を掛けるんですね。朝、会ったら、とにかく、おはようと、こちらから元気よく声を掛けるんですよ。これがなかなかできないんですよね。これは飛び込みセールスと一緒でね、最初の一歩がなかなか出せない。１件、飛び込んでしまったら、もうあとは惰性で行ってしまえるんですけど、最初にやるということは、なかなかこれは難しいんですよね。だけど、どうしてもこの人とは仲たがいの状態で置いておきたくない。なんとかしたいと思ったら、とにかく勇気を振り絞って、嫌な人に対しても、まずは、おはようと、声を掛ける勇気が出てくるかどうか。それがどれほど強くその人との人間関係の修復をする人間が願ってるか、祈ってるかということを、示すわけですよね。**

**だけど、そのときにでもですね、こちらから相手に対して、おはようなんていうようなことを言ったら、相手にこびへつらってるんじゃないかっていうような気持ちになってしまったりね。相手におはようなんてこちらから言ったら、負けました、降参しましたっていうようなことになってしまうんじゃないかなというようなことになって、そういう気持ちになってしまったりして、またそれでも、そういうこともあって、なかなか声を掛けづらいんですよね。だから、とにかくは、自分のほうにね、この人とは絶対に仲たがいの状態ではいたくないんだという、強い愛の欲求があったならば、例え相手にどう思われようともね、とにかくは、そのよい状態に持っていくという結果を出すためには、とにかく、まず声を掛けなければならない。最初ですね、おはようって言えても、相手にとっては、何を言ってんだっていう感じで、ふうんって言って、なんにも、一瞥もしてくれないで、そのまま行ってしまうっちゅうようなことは続くんですよね。毎日、毎日、おはよう、おはようって言っても、相手はもう素っ気ない感じで、ぱあっと行ってしまうと。すると、こんだけ毎日、毎日、おはようって言ってても、全然、相手が何も振り向いてくれないようじゃ、もう駄目だなと思って、そこで諦めてしまったら、それまでの愛なんですよね。**

**これは人生の成功を勝ち取るためにも、そうですけど、成功する人間というのは、成功するまでやった人間でね、途中でやめた人間は、失敗した人間なんですよ。その根気がどこまで続くか。それは、どれほどの強い思いを自分が持ってるかによって決まるんですね。是が非でも俺は成し遂げたいと思うことがあったならばね、結果が出るまで頑張れるんですよ。ここまでやって、もう駄目なんだから、俺はもう駄目だ。それは、そこまでの願いしか、祈りしか、欲求しか持ってない人間なんですよね。これは単に愛の問題だけじゃなくって、人間の生き方そのものに関わる。また成功する人間になれるか。あるいは挫折する状態で終わってしまうか。それを決める大きな、これは問題なんですね。成功した人間は、成功するまで頑張った人間だ。失敗した人間は、途中でやめた人間。けっこう、成功者と失敗者は単純な、そういう違いなんですよね。**

**だけども、なんで成功するまで頑張れたのか。なんで途中でやめたのか。それは、命から湧いてくる欲求の強さの違いだ。どれほど強くそれを願ってるか。本気か、本気じゃないか。その欲求、自分の持ってる欲求の強さが、結局は、最後までやり遂げるか、途中でやめてしまうか、決定する。本気だったら、本音で願っておったら、最後まで、結果が出るまでやってしまうんですね。人間というのは、毎日、毎日、おはよう、おはようって、言い続けられると、必ず、いつかどっかでね、おはようと、言い返してくるときがやってくるんですよ、これは。永遠に何も言わないで済んでしまうことはないんですよね。おはよう、おはようって、言い続けておったらね、必ず相手も、ついうっかりというか、ついうっかり、やあ、おはようと、言ってしまっちゃったりして、あ、言ってしまったなんていうようなことになってしまったりして、そこから、急に人間関係がよい方向に、展開し始めるということになったりする。とにかくは、偶然にうっかり言ってしまったということにならなくってもね、毎日、おはよう、おはようって言い続けられれば、どっかで、おはようと言わないといけないようなね、そういう気分に、人間はさせられてしまうもんですよ。そういう気分に相手がなってくれる状態になるまで、こちらは根気よく相手におはようと、言い続けることができるかどうかということですよね。その結果が出るまで頑張る。相手からおはようという声が返ってくるまで、おはよう、おはようって言い続けるということが、どれほど相手に対して、人間関係の修復を強く願ってるかという自分の愛の証明になるわけですね。途中でやめてしまったら、そこまでの愛だ。是が非でもという、この人と絶対に仲よくなりたいんだということがあったならば、絶対、人間関係の悪い状態で置いておきたくないんだということがあったならば、結果が出るまで頑張るという、その忍耐力が出てくるわけですね。**

**で、皆さん方が自分自身で考えてもそうだと思うんですよ。誰かに、毎日、毎日、おはよう、おはようって、言い続けられたらね、もうとにかく、根負けしてしまったりして、こちらからも、おはようって、つい言ってしまうような、そういう気持ちにさせられてしまうということがあるんですよね。そこまでこちらが忍耐強く頑張らんといかんと。その権利さえね、つかんだならばね、修復できない人間関係はないんだって、自信ができてくるんですよ。どんな人とでも、それさえやったならば、必ず人間関係は修復できるんだって、自信ができてくるんですね。どんな人間とでもね、こちらから声を掛け続ければね、相手からも必ず声が返ってくるときがくる。必ずそうなるんだっていう、これは信念が大事なんですね。相手からも、こちらのほうに声が返ってくるということは、相手からもこちらのほうに心の橋が渡り始めたという、そういう結果なんですよ。そういう、この現象なんですよね。**

**こちらから相手に声を掛けるということは、こちらから相手に心の橋を渡す行為だ。相手からこちらのほうに声が返ってきたということは、あちらのほうからも、こちらのほうに心の橋が渡り始めたということなんですね。心の橋が渡るということはなんなのかっていったら、心を開き始めたっていうことなんですよ。で、相手からこちらのほうに声が返ってくると、相手は少しずつ、心の扉を開き始めたもんですから、突然ね、相手のいいところが見え始めてくるんですね。相手がこちらのほうに声を掛け返してくれるようになってくると、突如、相手のいいところが見え始めてくるんですよ。これは皆さん方も実践的にやってみたらね、必ずそうなるんですよ。**

**本当に何かしら、相手の中に、ここはいいなというところのものをね、見いだしたならば、積極的にそのいいところを褒めるっていうことをしないといけないんですね。人間関係を修復しようと思ったら。褒められれば、誰でもうれしいですからね。だけど、褒めるといっても、褒め過ぎてしまっちゃったら駄目なの。褒め過ぎてしまうと、褒め殺しになってしまったりして、何をおべんちゃら言ってんだっていうようなことになってきたりして、かえって悪影響になってきますからね。だから、褒めるんでも、自分がいいなと思ってる程度に褒めておったんじゃ、またこれも頼りない褒め方なので、ちょっとだけオーバーに褒めるんですね。あんまりオーバーに褒めてしまうと、褒め過ぎになってしまって、うそっぽくなってくる。ちょっとだけよっていう、ちょっとだけよというサービスって、ちょっとだけよというこのスパイスの利かせ方と申しましょうか、ちょっとだけっていうサービスが非常にこれ大事で、ちょっとだけオーバーに褒められると、ああ、そんなに自分のことを評価してくれてるのかと、思ってしまったりして、非常に気分よくなるんですね。**

**褒められると、人間は必ず、褒めてくれた人に対してだけは、自分の褒められたところのものを出しながら付き合ってくれるように変わってくるんですよ。褒め続けてあげるとね、褒められた人間は、その褒められたものを出しながら付き合ってくれるように変わってくるんですよ。みんなそうなんだ。褒めあげてで、で、褒めてあげたところのものを相手が出しながら付き合ってくれると、だんだん、だんだん、こちらが相手を好きになってしまうんですよ。これは嫌いな人間でもね、褒め続けておると、いつの間にか、その相手を好きになってしまってたというような状況になってしまうということはよくあるんですよね。無理にでも褒めておったらね、褒め続けておる間に、好きになってしまうということはあるんですよ。それが本当にここはいいなと思うところもあった場合ね、それを褒め続けてると、必ず、相手は褒めてくれた人に対してだけは、その褒められたところのものを出しながら付き合ってくれるように変わってきます。すると、ますますこちらが相手を好きになるんですね。**

**で、人間関係が急展開して、がらっと変わってくるときというのは、言葉で褒めてる段階じゃないんですよ。相手を好きだなと思う目で相手を見始めたりね、相手を好きだなと思うような、そういう表情、態度がね、こちらのほうににじみ出てくるとね、その相手を好きだなと思う、その目や態度や表情に感応して、相手は態度をがらっと変えてくれるんですよ。それは、皆さん方自身もね、相手に対する対応を自分が変えるときというのはどういうときかということを、考えてもらったらすぐわかりますよ。相手から自分のことをね、なんとなく、好きやねんっていうような目で見始められたらね、いつまでも嫌いやっちゅうような感じではおれへんのですよね。相手の目の変化がね、こちらの対応、態度をがらっと、変えさせる、そういうこの力を持つんですよ。人間関係って、目ほど大事なものはない。**

**また、あと嫁姑の関係、よく悪いというようなことをね、申しますけど、あれは言葉では互いに褒め合っておったりね、顔の表面では笑っておったりするんですけども、いいことを言いながら、笑い合いながらもね、目の底でにらんでるんですよね。だから、それがあるから、なかなか人間関係が修復できないんですよ。いいことを言いながらもね、もういっときでも早くその場から逃れたいということで、いいことを言いながら、体の姿勢が斜になってるんですよね。ちょっとでも早く逃げたいというような感じで。だから、どんなにいいことを言っても、態度がそうだから、ますます嫌みになるんですね。でも、いいことを言えば言うほどね、嫌やなと思いながら、いいことを言えば言うほど、顔が、引きつってくるわけですね。いいことを言ってても、顔がピクピクしておったり、なんか引きつってるみたいな感じなので、ますますうそっぽいということになってきて、いいことを言えば言うほど、かえって関係が悪化するみたいなね、そういうことになってしまうのが、嫁姑の関係っちゅうようなことを言われる問題なんですね。**

**特に人間関係において、目つき、相手を見る目がどうかということほど大事なことはない。相手を、相手と接するときの態度はどうか。これほど大事なことはない。相手と接するときの表情はどうか。これほど大事なことはない。だけど、自分ではわからんのですよね。その人と自分が向かい合っとるときに、自分の表情がどうか、自分の態度がどうか。自分の目つきがどうかというのは、自分ではわからんのですよね。鏡で見てるわけじゃないから。それはどうしたらわかるのかっていったら、相手が自分に対して、どういう目つきになるか、どういう表情になるか、どういう態度になるかを見て、自分が相手を見るとき、どういう目だったのか。自分が相手に接するときには、どういう態度だったのか。自分が相手に接したときに、どういう表情だったのかということを反省するんですね。相手の心の動き、相手の表情の動き、相手の目の変化、相手の態度の変化、相手の表情の変化を感じ取りながら、自分が相手に接しておるときの目つきや表情や態度に何かしら、変な、嫌なところがあったかどうか、ちょっと確認し合うんですよね。これがね、人間関係というものの根本原理なんですよ。とにかく相手が自分にどう対応してくるかは、自分が相手にどう対応しておったかの見返りなんですよ。**

**なんか最近、あいつの態度、おかしいなというのはね、先に自分のほうが相手に対して取った態度の中に、なんかしら、相手を嫌やなと思わせることがあったんですね。だから、相手は態度を変えてしまったんです。だから、相手がどう変化するか。相手がどう自分に対応してくるかは、自分が相手にどう対応しておったか、あるいは、自分が相手にどう対応したかの見返りなんですね。そういう反応を自分が見ながら、自分が相手に対して対応する目つきや表情や態度や心持ちを変えていくという、その努力が、人間関係の努力なんですよ。人間というのは、言葉ではなかなか変わらないし、動かない。人間関係が急展開するとき、人間の関係が変わるときというのは、相手を見る目の変化なんですね。こちらが相手を見る目の中に、前とは違った目があるかどうか。相手に接する態度が、こちらのほうから、変わったかどうか。あるいは、相手と接するときの表情が前とは違ったかどうか。それによって、相手はこちらに対する対応を変えてくれる。**

**これが感応妙といって、感応妙というのは、感じるという字と、それから、応答関係の応というね、応接間の応という字でね。感応妙というのは、女偏に少ないという字を書くね、妙という字。感応妙、これ、感応妙がね、人間関係の機微なんですよね。そういう目に感応し、表情に感応し、態度に感応して、人間関係は変わるのであって、言葉ではなかなか変わらない。相手が変わってくれるときっていうのは、こちらが相手を見る目の中に愛が出てきたときに、相手はその目に表現された愛に感応して、こちらに対する態度を変えてくれるんですね。これがどんな人でも好きになる実力をつくる方法なんですよ。まず声を掛けて、そして、その相手から声が返ってくるのを待つ。そして、相手から声が返ってきたら、相手も少しずつ心を開いてくれたっていうことですから、だんだん相手のいいところを見始めてくる。いいところが見えたら、ちょっとだけオーバーに褒めてあげる。その人は、褒められたところも出しながら、こちらに付き合ってくれるように変わってくる。相手が、こちらが褒めてあげたものを出しながら付き合ってくれると、好きになってしまう。好きやなという、いい人やなという気持ちが自分の中に出てくると、自分が相手を見る目が違ってくる。その目に感応して、相手は態度を変えてくれる。これが人間関係修復の、根本原理であります。全部が全部、これでうまくいくということは言えないかもしれませんけど、これが根本原則なの。関係修復の土台になる原理なんですよ。それを土台にしながら、これからあと、お話をするその４項目のことを積み重ねていけば、どんどん、どんどん、人間関係の修復の実力が成長していくということになるわけですね。**

**次、２番目の人間関係の修復の原理というのは、これはなんなのかというと、１番目の原理はあれですからね、どんな人でも好きになる実力。それと対を成すものでね、今度は誰からでも好かれる。誰からでも好かれる実力をどうつくるか。誰からでも好かれる実力というのはなんなのかといったら、人間的魅力の形成ですね。どんな人からでも魅力を感じてもらえるような自分になれるかどうか。だいたい美男とか美女とかというのは、もうそれだけでも魅力を感じてもらえるような内容なんですけども、だけど、どんなに美男、美女でもね、傲慢さが出てきたら嫌われますからね。人間的魅力というのは、どうしたらつくっていくことができるのか。これ、人間的魅力の形成において努力をするということは、またこれ、非常に大事な人間関係修復の実力をつくっていく方法であります。人間的魅力というのは原理的に見て３つあるんですね。これは人間が理性、感性、肉体という、３つの要素からできてますから、人間には理性的魅力と、感性的魅力と、肉体的魅力と３つある。**

**人間の魅力というのはね、顔がいいとか悪いとかに関係ないんですよね。だいたいが、「フーテンの寅さん」とかね、『釣りバカ日誌』のハマちゃんなんていうのは、そうべつに褒められた顔じゃないんだけども、だけど、役にはまると、ものすごい魅力が出てきてね、俺もあんな男になりたいなとか思ってしまったりするんですよね。なんかしら、顔は大したことなくっても、ほれさせるという面が、にじみ出てくるんですよね。それが魅力というもんですね。どんなに美人でもね、やっぱり、魅力がにじみ出てこないと、本当の魅力にならないんですよね。かえって、ただきれい、美しいだけじゃ、嫌みになってしまったりするんですよね。だから、必ずしも、美人だから結婚できるっちゅうわけじゃないんですもんね。どういう魅力をその人間が持っとるかは、その顔が整ってるか、整ってないかとは全然違うことなんですよね。顔はどんな顔でも、とにかくは、人間は魅力を持てるんですよね。また、その顔は、その顔なりの最高の魅力というのがあるんですよね。形じゃない、もう最終的には。どういう魅力をにじませるかというのは、これはもう内面的な問題ですからね。**

**そういう魅力のつくり方に３つの魅力のつくり方がある。人間は理性、感性、肉体という３つの要素からできとるから、人間には理性的魅力と感性的魅力と肉体的魅力という、３つの魅力のつくり方の原理がある。理性的魅力とはどういう魅力なのかといったら、理性的魅力というものの中にも、また３つの魅力があって、第１番目は知識の量ですね。なんでこんなことまで知っとんのというような感じで、よくその『クイズ王決定戦』の中に出てくるような、そういう『クイズ王決定戦』で最終まで残るような人というのは、本当にもう、めちゃめちゃ知っていて、百科事典の隅っこに書いてあるようなことまで知っとったりして、もうこいつ、人間かなと思うみたいな、それぐらい知っとるようなことがあったりするんですね。感動してしまうと。すごいなと思って。知識の量がね、人間を感動させて、ほれさせるということはあるわけですよ。すごい人やなと思ってしまったりして、憧れちゃったりして。だけど、知識の量というものがあるから、魅力があるというんじゃないんですね。知識の量というのは、本当に、人間的魅力として輝くためには条件があるんですよ。**

**どんだけたくさん知識を持っておっても、それが自ら求めて、要求して、自分が通って獲得した知識じゃなかったならば、魅力にならないんですよ。命を輝かせないんですよ。欲求もないのに、問いもないのに、求めもしないのに、無理やりに覚えた知識というのは、かえって人間の命を曇らせるんですね。これも受験だとかね、就職試験だとかね、とにかくしたくはないのにね、無理にせないかんということで、無理やりに覚えた知識というのは、かえって人間の命を曇らせてしまってね、魅力をなくさせてしまうんですよ。なんでかといったら、無理やりに覚えたものは身に付いてませんから、観念なんですね。観念というのは、固定観念、先入観念というのは、そういう観念になってしまうと、人間を縛るんですよね。窮屈にしてね、人間の命の輝きというか、いきいきとした、そういうものを奪ってしまうんですよ。あんまりにもそういう固定観念を持ち続けてしまうと、自閉症になるんですね。あまりにもそういう固定観念を持ち過ぎてしまうと、その固定的にものを見ることしかできませんから、変化が怖い。変わることが怖いというね。そういうふうな、気分が出てきたりするんです。**

**だけども、求めて獲得したものはね、なんでやろうなと思ってね、ああ、そうかと思ったら、一生、忘れない。それは身に付くからですね。身に付いたものは、自分がその知識を使えますからね、縛られないんですよ。求めて獲得したものは、使える知識になって縛られない。だけど、求めないで入ってきたものは自分を縛ってくるんですね。自分を支配してくるんですね。だから、命の輝きがなくなってしまうんですよ。なんでやろうなと思って、ああ、そうかと思ったらね、これは命に染み込むというか、よく肉化するとかね、ということを申しますけど、命に染み込んでしまうので、俺のものになってしまう。俺のものになると、自分で使えますからね、支配されないんですね。だから、命を輝かせるんですね。だから、あの『クイズ王決定戦』の中に出てきて、百科事典の隅っこに書いてあることまで知っとるみたいな、ああいう人というのは、ものすごい並外れた認識欲があるんですね。知りたいという気持ちが強いんですよね。知ることがうれしいんですよね。どんどん、どんどん、それで覚えてしまって、いったん覚えたら忘れないんですよね。なんでやろうなと思って調べて、そうかと思ったら忘れないんですよ。だけど、その知りたいと思わへんのに、無理やりに勉強せないかんのでね、覚えてしまったというのは、だいたいもう一晩たったら忘れてますからね。身に付いてないから。ものすごい違いですよ。求めて獲得したものは忘れない。求めないで入ってきたのはすぐ忘れてしまう。求めないで獲得した知識は人間を縛る。自分が支配されて、縛られて、だんだん身動き取れなくなってしまうんですよね。**

**とにかく、知識の量といったって、知識の量が魅力になるっていったって、知識の量が命を輝かせるためには、自ら求めて、問うて、欲求して、獲得したものじゃなかったならば、それは魅力にならないということですね。仕事を覚えさせる場合でもね、仕事に興味や関心を持たせてからね、その仕事の知識や技術を教えたら、砂に水が染み込むように身に付くんですけど、興味や関心を持たせずに、単に仕事を覚えさせようとして、知識や技術を与えようとすると、その人間は、その知識や技術に縛られますからね、永久に仕事をさせられてるという感じでしかやってくれないんですよ。だけど、興味や関心を持たせてからね、その知識や技術を教えると、興味を持って獲得しますから、させられてるじゃなくて、したいと思ってするということになってしまって、積極的に自分はその仕事に関わるという姿勢に変わってくるんですよね。これもやっぱり、社員教育の中では大事な方法論なんですよ。学校教育でもそうですけど、もうとにかく、興味を持たせたら、染み込むように入っていくんですけども、興味を持たせないと、無理やりですからね、なかなか覚えてくれない。これは教育効果の上でものすごく大きな違いがあるし、またその人の命を輝かせるか、曇らせるかの、大きなこれは原理的な違いになってくる。**

**とにかくは、理性的魅力の第１番目は知識の量なんですよ。知識の量が感動を呼ぶということはありますからね。理性的魅力の２番目は、知恵。あいつはなかなかの知恵者やなと。なんでそんな知恵が湧いてくるんやろうなという、知恵の湧いてくる人間がおるわけですね。知恵という能力の魅力というのはどうしたらできるのか。それは今、自分の持ってる理性の力とか、今、自分の持っておるこの知力で、理性の力で、できることしかしようとしない人間は、知恵は出てこないんですよね。今、自分の持ってる力じゃ、なんともならん。だけど、なんとかしようと思って努力してると、知恵が湧いてくるという構造ができてくるんですよ。知恵というのは、これは命から湧いてくるもんですよね。命から湧いてくるものというのは、今、自分の持ってる力ではなんともならんという状態になったときに、命から湧いてくるもの、出てくるんですね。今、自分の持ってる力で、できることしかしようとしないという状態だと、今、自分の持ってる力でできてるんだから、ほかの力はいりませんから、湧いてくるものは出てこなくなってしまうんですよ。だから、知恵者という、そういう人間になりたいと思ったら、現在、自分が持っておる力の限界に挑戦するという、そういう生き方をなんとか続けていかないと、知恵が湧いてくるという構造は命にできないんですね。だから、知恵者というのは、だいたいみんなそうですけど、知恵者と言われる人間は、現在、自分の持っておる知力の限界、気力の限界、体力の限界に挑戦するという、そういう生き方をしてるんですよ。しょっちゅう、そんなことをやってたら、神経衰弱になってしまいますけど、人生の中でね、なんとかそういうふうな、知力の限界、気力の限界、体力の限界に挑戦すると、そういう生き方をしてるんですよ。**

**じゃあ、その知力の限界、気力の限界、体力の限界に挑戦するという生き方はなんなのかといったら、これは寝食を忘れ、時間を忘れて没頭するという、そういう生き方、そういう仕事の仕方ですね。時間を気にしておったりですね、食うことを気にしておったり、寝ることを気にしておったりして、ああ、もう寝やないかんと、もう何時になったから、寝やないかん。もう昼だから、食べないかん。そういうことをわかってる間は、まだ駄目なんですよね。もうこんな時間になっちゃったとかね、気が付いたら飯食うの忘れとったとかですね。そういう状態の努力が続くと、どんどん、どんどんね、集中力という、そういう構造ができますからね。集中力というのはなんなのかといったら、自分の意識の根を深めていくんですね。知恵というのはどこから湧いてくるんですかといったら、知恵というのは、染色体の中にある遺伝子から湧いてくるんですよ。だから、染色体にまで自分の意識の根が届かないと、知恵が湧いてくるという構造ができないんですよね。知恵というのは、染色体の中に集まっているんですよ。染色体の中にある遺伝子っていうのが、能力の束なんですよ。潜在能力いうのは、全部、遺伝子の中にあるもんですから、遺伝子にまで、遺伝子が存在しておる染色体にまで自分の意識の根が届かないと、知恵は出てこれない。**

**染色体というのは、これは皆さん方も生物学でね、学校で習われたと思うんですけど、染色体というのは、一個一個の細胞の核の中にあるわけですよね。一個一個の細胞の核の中に染色体がある。その染色体の中に何個かの遺伝子があるというのが、この遺伝子のあり方ですよね。人間というのは、約３万個の遺伝子を持っておるということが、最近のヒトゲノムの解読でわかったんですね。それで、そのヒトゲノムの解読で人間には３万個の遺伝子があるということがわかったということは、人間には３万個の潜在能力があるということなんですよ。そういうこの遺伝子の中にある潜在能力というものが、時に応じて出てきてくれて、今、自分の力ではできないことをさせてくれるという、そういう仕事をしてくれるんですよね。だから、知恵者という、そういう魅力を持ったね、知恵で人を感動させるという、そういうこの人物になりたいと思うならばどうするかといったら、その知力の限界、気力の限界、体力の限界に挑戦して、時を忘れ、寝食忘れて没頭するという、そういうこの生き方、仕事の仕方ということをせんと、セントバーナードなんですね。せんといかんと。**

**そういう、集中力を持って、時を忘れて仕事をしてると、意識の根が深まっていくんですよね。意識の根、どんどん深まっていって、その意識の根がこの染色体にまで届くと、そうすると、染色体の中にある遺伝子が目覚めてきたりして、知恵が湧いてくるという構造が、できていくわけですね。とにかく、今、自分の持ってる力で、できないことはできませんって、簡単に断ってるようじゃ、もう絶対、知恵者にならん。とにかくは、今、自分の持ってる力ではなんともならん。だけど、なんとかしたいという、そういう頑張り方をする人間だけが、知恵というものを持って、生きていく。知恵が湧いてくるという構造を持った命になれるんですね。この知恵というのは、これは、その染色体の中にある遺伝子から湧いてきますから、染色体の中の遺伝子というのは、これ、全人類に共通してるんですよね。だから、知恵というのは、これは類の力が出てくるんですよ。類の力。理性の力というのは、これは自分だけの力ですけども、その染色体から出てくる、この遺伝子から湧いてくる潜在能力の力というのは、これは類の力ですからね。そうすると、この類の力が湧いてくる、知恵が湧いてくると、人間は個の限界を超えた仕事ができるんですよ。普通の人間にはできないようなことができてしまうというね。個の限界を超えた仕事ができる。**

**松下幸之助さんとかですね、それから、本田宗一郎さんとか、またアメリカの発明王のエジソンさんとかね、こんな方々がなんであんな大人物になったのか。小学校すら出てないんですよ、皆。なんであんな大きな会社をつくってね、なんであんな大仕事ができたのか。あれは知恵で勝負したからなんですよ、知恵で。知識じゃなくて、知恵で勝負したから、ああなったんですよ。なんで知恵で勝負できたのかといったらね、小学校すら出てませんからね、だから、現在、自分の持っておる理性の能力、知力というのは、すぐ限界に到達するんですよ。あとなんとかしようと思ったら、もう湧いてくる知恵で勝負するっきゃないという世界になりますからね。今、自分の持っておる力が少ないから、すぐ自分の能力の限界にきてしまったりして、なんとかしようと思うと、もうあとは知恵が湧いてくるっきゃないという構造でね、知恵が湧いてくるから、個の限界を超えてしまうので、大仕事ができるんですよ。なまじっかね、大学や大学院を出てしまうとね、なかなか現在、自分の持ってる知力の限界に到達しなくって、今、自分の持ってる力でほとんどのことができてしまうのでね、なかなか知恵が湧いてこないんですよ。**

**だけど、ソニーがまたなんであんな世界的なトップ企業になったのか、大企業になったのか。あれは、盛田さんとか、井深さんなんちゅうのは、もう大学者でね、本当に博士もかなわんぐらいの能力を持ってる方なんですよね。だのに、なんであんな大会社がつくれたのか。あれは井深さんとか、盛田さんという方々がね、常に自分の現在、持ってる知力の限界に挑戦するという生き様をし続けたんですよね。そしたら、どんどん、どんどん、底力が湧いてきて、知恵が湧いてきて、常にその時代の技術の革新というものに挑戦し続けたんですね。だから、類の力で勝負ができたから大会社になった。とにかく人間が個の限界を超えたね、そういうことができるという、そういう状態になるためには、どうしても知恵が必要なの。命から湧いてくる類の力が出てこないと、人間は個の限界を超えられないんですよ。その個の限界を超える、潜在能力が出てくるということは、これは創造力ですからね。創造力というのは、今ないものをつくるっていってから、今までできなかったことをできるようにしていくという力が創造力で、それがまた、これ、知恵として湧いてくるもんなんですよね。**

**だから、想像力のある人間は新しい時代をつくり、歴史をつくり、いろんなものを進歩させていく。だから、その意味においても、個の限界を超えてしまうんですね。とにかく、自分自身が知恵で勝負する、命から湧いてくる力で勝負する、生きるというね。そういう知恵者という、魅力を持ったね、人間になりたいと思ったならば、今、自分の持ってる力で満足しとったらいかんと。とにかくは、今、自分の持ってる力の限界に挑戦して、今、できないこともなんとか、もっとできるようになりたいというね、そういう意欲に燃えてこないと、知恵は出てこないんですよね。これは皆さん方が自分のお子さんを育てる場合にも、そんなことは知ってないといかんし、社員教育をする場合でも、それは知ってないといかんし。自分自身の人生をつくっていくためにも、それは知ってないといかん。今、自分の持ってる力でできることしかしようとしない。そういう消極的な人間は、もう自分の殻に閉じこもったような状態で、成長しないし、また、湧いてくるというものがなくなってしまうんですよね。**

**３つ目の、この理性的魅力はなんなのか。それは天分ですね。天分、素質。野茂とか、イチローとかというのは、あれはまさに持って生まれた天分のツボにはまっちゃったんですよね。どうして野茂とか、イチローというのは、ああいう独特のフォームを持ったね、大選手が出てきたのか。あれは癖を磨いたんですよ。普通は、癖というのは直されてしまうんですよね。だけど、いいコーチやね、監督に出会ったりして、その癖を磨いてもらって、独特の、野茂にしかできん、イチローにしかできんって、独特の感覚、フォームを持ったんですよね。あれ、癖を磨いたから、大選手になった。癖というのは、これは能力の偏りなんですよね。普通は、理性で考えたら、偏ったらいかんというふうに思ってしまうんですけど、だけど、その偏りが個性なんですよね。だから、癖を磨くと個性が出てくるわけですよ。癖を直されてしまったりすると、平凡な人間になってしまったりして、みんなと同じことしかできんことになるんですね。**

**だいたい学校っちゅうのは、皆、癖を直されてしまってね、平均化されてしまうんです。だから、生まれたときは神童で、５歳で天才で、10歳で秀才で、学校を出たらただの人になってしまうというのが、現代の平均化されたね、学校教育の結果なの。そういう学校教育の平均化するようなね、長所は長所でいいんですから、短所をなんとかしましょうねっていって、長所を伸ばしてもらわないでね、短所で努力させられたりして、短所がなくならないと卒業はできませんよなんていうようなことで、この短所で頑張らさたりして、平均化されてしまったりして、個性がなくなってしまうというね、そういう状態にさせられてるのがほとんどの人間なの。それを学校とは別個の場で教育されてしまってね、癖を磨いてもらった。だから、野茂とかイチローが出てきた。**

**職場は学校じゃないですからね。職場こそ、まさに癖を磨いてね、独特の能力を持ったね、存在感のある人間にしてあげるという社員教育をせんといかんとこなんですよね。独特の能力を持った才能の組み合わせが、わが社だっていうね、そういう素晴らしい能力の高さというものをつくっていくことを目標にしなければならない。誰でも置き換えが利くというのは、存在感のないね、没個性的な人間ばっかりおったんじゃ、大した会社になりませんからね。このことに関しては、こいつに任せといたら、もう最高のことやってくれるっていうね。そういう人間ばっかりが会社におったら、もうどんなすごいことになるかということですよ。そういう、その分野の最高の能力を持った人間同士の組み合わせっていうものをつくっていくのが、横型社会における組織のあり方ですからね。少数精鋭の部隊というのは、そういうふうにしてできるんですよ。**

**よくほら、映画でね、銀行強盗しようと思うと、そうすると、金庫破りの名人とかね、あるいは、車の運転の名人とかね、いろんな名人を集めて、最高のチームをつくって、捕まらんような、そういう犯罪を考えるんですよね、完全犯罪。ああいうのは映画の中でしかないようなことかもしれませんけど、だけど、ああいう、最高の仕事というのは、もうその分野、分野の最高の人間ばっかりが集まって、最高の仕事ができるんですよね。だいたいあんなのは、刑務所の中で知り合ってね、こいつが一番すごいやつやっていうのが、その刑務所から出て、仲間をつくったりするんですよね。最高のチームをつくって、犯罪を犯すと。会社の中でも、とにかくは、この分野においては、こいつが最高やっていうのばっかりを集めてチームをつくったら、最高な仕事になるわけですよね。そういうのは、やっぱり、その人間の持って生まれた天分を輝かせるという、そういう教育の仕方をセントバーナードなんですよね、これは。天分というのは、これは能力の偏りなんですよね。だから癖とか、そういうふうにして出てくるんですよね。癖、能力は、偏ってるもんですからね、普通はちょっと、嫌がられたりするんですけども、普通じゃないっていうように見られるんで、その普通じゃないところをもっと磨いたら、魅力になるんですよね。普通じゃないっていう状態で終わってしまったら、これはなんとなく、例外者というか、嫌な感じなんですけども、それをもっと磨いてしまうと、魅力、輝きが出てくるんですよね。**

**これは前回も話したかもしれませんけど、顔が違うっていうことは、他人にはない何かができる人間やということなんですよね。かたちというのは、これは内容の表現ですからね、かたちが違うっちゅうことは内容が違うんですよね。機械でも新しい機能が付け加わったら、機械のかたちが変わるんですよ。かたちが違うということは、ほかの人間にはない何かを持ってるということなんですよね。それも完全にね、顔が違うということはね、ほかの人間にはできん何かができる人間なんや。俺は、ほかの人間にできん何かができる人間なんやということをね、天が、大自然が、自分に教えてくれてるというようなもんなんですよね。顔が違うということは、確実に自分にしかできんということがあるということをね、これは天が教えてくれてるようなものなんですよ。そのためには、自分が持って生まれた天分のツボにはまるというね、生き方をせないかんと。天分というのは、能力の偏りなんですよ。なんで能力の偏りができてくるのかといったら、この生物の進化というのは、これは類とか種の単位で進化するんですけども、だけども、自分というのは、ずっと個の連続性でつながってるんですよね。アメーバというか、単細胞生物の時代からね、ずっと個の連続性で連なって、自分の命にまで到達してるわけですよね。**

**だから、これも前にお話をしたことですけども、自分の個体的な生命年齢はね、生まれてから何十歳ですというようなもんなんだけども、実は自分の個体の中で息づいておる命そのものは、みんなもう、皆さん方も、私も、みんなこれ、35億歳なんですからね。皆さん方も、自分の生命年齢はおいくつですかって言われたら、35億歳ですって、言わないかんのですよ。35億歳なんてもう、信じられないような、35億年もみんな、皆さん方も生きてきたんですよ。35億歳なんていうのは、もうこんなん、もう本当にもう、おじん、おばんどころじゃないと。もう化石どころじゃない。もう本当にもう、なんちゅうか、本中華、冷やし中華ですね。なんとも言いようのない、35億年なんて、どうやって生きてきたんですかっちゅうようなもんで、もう信じられないような年月をずっと皆さん方、生き続けてきたんですよ。でなかったら、自分は存在してないんですもんね。**

**その間、どういうふうにして生き抜いてきたのかといったら、みんな個の連続性でつながってる。自分には自分の直接のお父さん、お母さんがいてね、そのお父さん、お母さんに、また直接のお父さん、お母さんがいてね、ずっとたどっていくと、そのお父さん、お母さんの直接の個のサルがおったりしますしね。そのサルさんの直接の祖先の恐竜さんがおったりして、この恐竜さんから進化したサルなんやっていうやつがおるわけですよね。その恐竜さんの向こうには、その恐竜さんの直接の祖先のカエルさんがおったりして、そのカエルさんの向こうには、そのカエルさんの直接の祖先のミミズさんがおったりして、ミミズさんの向こうには、そのミミズさん、そのミミズさんの直接の祖先のアメーバさんがおったりして、ずっと個の連続性で自分までつながってきてるんですよね。だから、あらゆるものが個性を持ってきてね、あらゆるものが能力の偏りを持ってるんですよ。**

**だから、みんな、俺にしかできんというのはあるんですよ、これは必ず。俺が世界一やっていうのはあるわけですよ。世界一というのは、ナンバーワンかオンリーワンか、競争して、勝ち抜いて、世界一になれるという分野かね、あるいは、俺にしかできんぞ、こんなことはという、そういうものがあるか、どちらかになれる。人間みんな、誰でも。それは顔が違うということの意味なんですよね。顔が違うということは、形が違うんだから、内容が違う。他人にはできない何かが俺にはできるということは、みんなあるわけですよ。それを発揮したら、天分を発揮したということになって、天分のツボにはまってしまったりして。そのすごい人間になれる。誰でもこれは。誰でも、野茂とかイチローになれる。それは教育のされ方、育てられ方なんですよね。いわゆる長所というのは、天分が人生の出会いによって引っ張り出されたものが長所なんですよね。長所というのは、天分が出てきたものなんですよ。だけども、いい出会いがなくってね、引っ張り出されないで、命の中でくすぶってる天分もたくさんあるんですよ。ですから、本当に自分が、自分の天分のツボにはまった、何かしら、世界一になれるという分野を自分が発見しようと思ったならば、自分の命に潜在する天分というものをどうしたら知ることができるのかって方法論をね、知ってないといかんと。**

**これもすでに２回ほどしゃべったことがあると思うんですけど、とにかく自分の天分をどう発見するか。俺が世界一になれるところというのをどう発見するか。これは５つの方法があるわけですよね。天分というのは、これは命に潜在する能力ですからね、だから、理性ではわからない。どんなに考えてもわからんのですよ。理性というのは、これは後天的な能力で、人間、生まれてからのちにできてくる能力ですからね。脳はあったって、理性はないんですよ、人間はね。脳というのは、これは持って生まれた肉体の一部分ですからね。脳が理性という能力を持つようになるためにはどうするかといったら、脳が人間の言葉を覚えて、人間の言葉を記憶して、人間の言葉を事実に合うように結び付けていくっていう作業をして、初めて考えるということができるんですよね。脳が、人間がつくった言葉である概念を覚えて、その概念である言葉を結び付けていく。しかもそれが、なんの規則もなく結び付けるんじゃなくって、事実に合うように言葉と言葉とを結び付けていくと考えるということができることになるわけですよ。だから、その理性という能力、後天的にできてくる能力ですからね。だから、後天的な能力では、先天的なものはわからない。先天的なものを知ろうと思ったならば、先天的な能力を使わないと、先天的なものはわからない。じゃあ、先天的な能力ってなんなんですかっていったら、これは天から人間に先天的に与えられておる、肉体という能力と、感性という能力を使わないと、命に潜在するものはなんなのかをつかめない。じゃあ、肉体という先天的な能力と、感性という先天的な能力を使ったら、どうしたら天分が見えてくるのか。**

**それが５つの方法なんですよね。俺の天分を、俺が世界一になれるところを自分で知ることができる。どうしたらわかるのかといったら、まずは、第１番目は、やってみたら好きになるかどうかということですね。やってみても好きにならんことは、絶対、天分やないから、やったらいかん。やってみたら好きになることには、何かしら天分がある。それが好きこそものの上手なれということが言われる原理なんですよね。昔から経験的に言って、好きこそものの上手なれっていうようにずっと言われてきた。好きなことをやっとらんと、絶対、成功はせん。嫌いなことをやっとって、成功する人間は絶対いない。好きなことをやっとらんと、天分のツボにはまれない。好きになるかどうかは、天分があるかどうかで決まるんですからね。天分がなかったら、どんだけやってみても好きになれん。天分があったら、やってみたら好きになってしまうんですね。なんでか知らんけど。だから、やってみても好きにならんことをやったらいかん。やってみても、やってみたら、好きになることをやらないかん。やってみたら好きになるところ、それこそまさに自分の天分のツボなんですね。やってみても好きにならん所さんはやったらいかん。**

**２つ目は、やってみたら興味や関心が湧いてくるかどうかですね。やってみるということは肉体を使うんですよね。好きになるかどうか、感性を使うわけですよ。そういう方法論でないと、天分という潜在するものはわからないんですよね。やってみても興味や関心が湧いてこんということは、これはもう天分はないんですね。絶対やったらいかん、やっても損だ。苦労するばっかりでね、つらいばっかりの人生になってしまうんですよ。やってみても興味、関心が湧いてこないようなことをやっとったらね、つらいばっかりの人生、嫌な人生、苦労ばっかりの人生。でも、やってみたら興味や関心が湧いてくることをやったらね、必ず平均を超えますからね。やってみたら好きになることをやったら、必ず平均を超えるんですよ。やってみて興味や関心が湧いてくることをやったら、平均を超えるんですよ。もう単に好きやっちゅうんじゃなくて、もうめちゃめちゃ好きって、もうやめられへんというようなことやったら、もうダントツになってしまったりしてね。**

**よく世の中には、楽して金がもうかる方法はないかって、言われたりするんですけど、あるんですよ、それがね。楽して金がもうかる方法は、天分のツボにはまることなの。他人よりも少ない努力で伸びてしまうんですからね、天分というのは。天分がなかったら、他人よりも４倍も５倍も６倍も努力したってね、どんだけ頑張ったって平均を超えないんですよ。頑張っても、嫌なことは。だから、もう天分のツボにはまったらね、笑いが止まらん人生ですよ。もう左うちわどころじゃない。もう左うちわ、右うちわでね、両方ともあおがないかんぐらい、もう笑いが止まらんという人生になってしまう。でも、天分というものにはまらなかったらね、結局は苦労するばっかり。どんだけ頑張ってもなかなか芽が出ないというね。そういう状態になってしまう。嫌な人生で、つらい人生、苦労ばっかりの人生。とにかく、その方法論としては、やってみたら好きになるかどうか。やってみたら興味や関心が湧いてくるかどうか。**

**３番目、やってみたら、得手、得意と思えるかどうか。やってみても、得手やなと思わんことはね、やったらいかん。そのときはね、他人よりもあんまりよくできてなくってもね、自分が得手やなと思ったら、やったら伸びるんですよ。だけど、そのとき、他人よりもよくできておってもね、得手やなと思わなかったらね、伸びないんです、それ以上は。４つ目はね、４つ目は、今度は他人と一緒にやってみたら、いつも自分のほうがよくできてしまうかどうか。他人と一緒にやったら、いつも自分のほうがよくできてしまうかどうか。それによって、自分の天分があるかどうかわかると。だいたいスポーツ選手って、陸上選手になるような方は、べつに走りは好きやっちゅうわけやないんやけど、走ってみたら、いつも勝ってしまうので、選手になってしまったっていう、そういう場合が多いですよね。**

**最後の５番目は、真剣に取り組んだら問題意識が湧いてくるかどうか。どんなに真剣に取り組んでも、言われたことを言われてるままにやってるだけで、なんの問題意識も出てこないということは、そこにはその人の天分はないんですね。天分があったらどうなるかといったら、他人に言われたことを、言われてるままにやろうと思うとね、ここのところはもうちょっとこうしたほうがいいんやないかなとかね、ここのところはなんか納得できひんなとかって、自分が、出てきてしまうんですよ。問題意識が湧いてくるということは、自分が出てきたということですね。それはそこには、その人の天分があるんですよ。何かしら、独特のことがその分野でできるということをね、その現象は教えてくれてるわけですよ。とにかくは、自分の命に潜在する天分、才能というのは、その５つの方法でしか発見できない。やってみたら好きになるところ、やってみたら興味・関心が湧いてくるところ、やってみたら得手、得意と思えるところ、他人とやったら自分のほうがよくできてしまうところ。あるいは、真剣に取り組んだら問題意識が湧いてくるところ。この５つのところ、上位３の中で、一番強烈なものが湧いてくるところが自分の命の使いどころのツボなんですよね。**

**好きやっていうことよりも、問題意識が湧いてくるということのほうが強烈であったならば、好きなところをやめておいて、問題意識が湧いてくるところに自分の命を懸けるというね、そういう生き方をすると、天分の花は咲く。笑いが止まらん人生になってしまう。とにかく、この５つの方法の中で一番強烈なものが湧いてくるところというのがね、自分の命の使いどころのツボなんですね。どんな仕事でもね、いろんな仕事が、いろんな職種というか、いろんな仕事の分野がありますからね。だから、この会社の中で、どの仕事が一番、俺の天分に向いておるのかっていうことをね、自分で探り求めていかないかんし、また上司の方々は、こいつはどの仕事をさせたら一番輝くのかということを見ながらね、その仕事を与えてあげなければならない。一番好きなことをさせてあげて、頑張ってもらおうというね。そういう組織をつくっていかないかんと。それが少数精鋭のね、部隊をつくるという原理ですよね。**

**とにかく皆さん方、一人一人ね、何が大事なのかといったら、顔が違うということは、自分が世界一になれるという分野があるんだということですよ、必ず。顔が違うということは、内容が違うの。内容が違ってこんと、顔のかたちができてこない。人類なんだから、みんな同じ顔をしておってもよさそうなもんですけどね、みんな顔が違う。なんでこんな顔が違っちゃったの。それは内容が違うからなんですよ。あらゆるものに個性があるからですよ。能力にも個性がある。だから、俺にしかできん分野があるんだと。俺が世界一になる。その分野があるんだ。ナンバーワンかオンリーワンか、どちらかに誰でもなれるんだと。その信念を持ってね、そのツボを探すっていう人生を生きなければならない。必ず自分にしかできんことがある。何をやったら、俺の命が輝くのかということをね、見いだそうとして生きなければならない。とにかく理性的魅力というのは、その３つです。**

**次は感性的魅力ですね。感性的魅力というのも３つあるんですね。感性というのは、これは理屈を越えてますからね、甘い、酸っぱいとかというようなのは、あんまりこれ、理屈がないですから、なんで甘いんやって、甘いんやから甘いんやっていう以外にないようなところですからね。感性は理屈を越えてしまってると。理屈を越えた力ってなんなの。それは愛の力、人間は深い愛に感動する。また、意志の力。人間は不撓不屈の意志に感動する。３つ目は人間性ですね。人間性の魅力。何かしら、そばにいてくれるだけでいいみたいな、そういう人間もおるわけですよね。なんかもう、そばにおるだけで面白いというのは、なんか楽しいとかね、なんにもせんでも、とにかくそばにおるだけでなんかいいなという、そういう人間性があるわけですよね。そういう、人間性の魅力っていうのがある。この愛の力、意志の力、人間性、この３つが、感性的魅力というものの中に入ってくると。**

**愛の力っていうのは、これは今、話してることがまさにそのものズバリなんですけどもですね。愛というのは理屈を越えておると。愛の魅力っていったいなんなのか。理屈を越えるということは、どういうことなのかということですね。誰かが自分にうそを言ったときね、あいつはもう、俺にうそを言ったんやから、もうあいつのことは信じないぞっていうのは理性なんですよね。だけど、理屈を越えるということはなんなのかっていったらね、理屈よりも感性を大事にする。すなわち、共感同苦の心を持つと。相手の心と共鳴し合い、相手の心と共心し合い、相手の苦しみを我苦しみとするという、そういう精神が愛でありね、感性なんですね。理屈でいったら、うそを言ったんだから、もうあいつは信じられんって、これは理屈なんですよ。だけども、人間っていうのは、うそを言いたくって、うそを言う人間はいない。裏切りたくって、裏切る人間はいない。だましたくて、だます人間はいない。人間はうそなんか言いたかないんだ。裏切りたくはないんだ。だけども、不完全というね、不完全という原理ゆえに、人間は不完全ゆえの弱さゆえにね、追い詰められてしまって、うそなんか言いたかないんだけど、うそを言わなけりゃならない状況に追い詰められてしまって、心ならずも、うそを言うんですよね。**

**だから、誰かが自分にうそを言ったときね、うそを言ったから信じないというのは、これはもう理性なの。だけど、あいつが俺をだますなんて、さぞかし大変なことがあったに違いない。あいつが俺にうそを言う、だますまで、あいつはどんなに悩んだんだろう。どんなに苦しんだんだろう、どんなにつらかったろう。その思いがね、共感同苦できることによってね、かわいそうになっていう気持ちが出てくる。それが愛なんですよね。共感する心が愛だ。自分の友人が自分を裏切ったっていうときにね、あいつは俺を裏切ったんだから、もうあいつは友人じゃない。もうあいつのこと、絶対、信じない。これは理性の人間だ。感性、心を大事にする人間ならどうなるかといったら、あいつが俺にうそを言うなんて、さぞかし大変なことがあったに違いない。どんなに悩んだんだろうな。どんなにつらかったろうな。さぞかし苦しんだだろうな。かわいそうになと思ってしまったりして、みんながあいつのことを見放したとしても、俺だけは最後まであいつのことを友人として関わっていってやろう。それが理屈を越えた愛なんですよ。そういう愛の精神が出てくることによってね、初めて人間には理屈では考えることができないような、素晴らしい愛の奇跡への扉が開かれる。愛の奇跡は決して神の専売特許じゃないんだ。人間が理屈を越えた愛に目覚めるときね、人間の世界には奇跡が生じるのである。理屈で信じることしかできないようなものしか信じられない人間には、理屈で考えることができるようなことしか生じない。だけども、理屈では信じられないようなものをね、信じて、信じて、信じ抜いていこうとすると、理屈で信じられないものを信じることは、まさにこれは奇跡ですからね。そういう奇跡的な決断ができる人間の人生にのみ、理屈では考えることができないような、素晴らしい人間関係、すなわち愛の奇跡への扉が開かれるんだ。理屈を優先させるか、愛を優先させるか、それによって、人間の人生は大きく違ってくる。**

**子どもが親にうそを言うこともあるわけですよ、何回もね。そのときに、普通のお父さん、お母さんだったら、うそを言っちゃ駄目じゃないかと、注意するんですよね。そうすると、子どもはどうなるかっていったら、そんなことぐらいわかっとるわと。なんで俺のこの苦しさがわからんのや。お父さん、お母さんなんて、全然、俺のことなんかわかってくれてへんやないかという気持ちが残ってしまうんですよ。うそを言っちゃ駄目じゃないかって言われるとね、だいたいそれはそうなんだけど、むかつくわけですよ。うそを言った人間が一番、うそを言ったことを知ってんですからね。それに輪を掛けて、うそを言っちゃ駄目じゃないかって言われても、そんなことぐらいわかっとる。わかっとるけども、なんでうそを言わんないかんような状況に、自分が、追い詰められてんのか。なんでその苦しさがわからへんのということですよね。人間、ぐれるのは全部それなんですよ。なんで俺のつらさ、なんでこの俺のさみしさ、なんで俺のこの苦しさがわかってくれへんねやというので、その苦しさ、つらさをわかってもらえるダチ公を求めてぐれちゃうと。**

**それはいったいなんなのかといったらね、その同じつらさを味わってる人間というのはね、どうなるかといったら、人間が本当につらいときっていうのはね、頑張れよって言われるほど嫌なことはないんですよね。こんなに頑張ってるのに、なんでなんともならんのやというのが、本当のつらさですからね。こんな頑張ってるのになんともならんというときに、頑張れよって言われたら、それほどしらじらしいね、他人ごとの言葉はないんですよ。本当につらいときはね、やっぱり何が欲しいのかといったら、心が欲しい、わかってもらいたい。心が欲しいと、なんなのかといったらね、そうだよな、つらいよなって言ってくれたらうれしいんですよ。それは共感同苦の世界。それが愛の世界。だから、子どもが、お父さん、お母さんにうそを言ったときにね、うそを言っちゃ駄目じゃないのっていうことを言ったお父さん、お母さんというのは、子どもから簡単に裏切られてしまう。お父さん、お母さん、全然、俺のことなんかわかってくれへんと思いますからね。どんどん、どんどん、成長するほど、親には話をしたくなくなってしまうんですよ。話ができるのはね、そうだよな、つらいよな。あのときは本当に苦しかったよなって、そういう共感同苦のね、共通体験を持ってくれてる人に人間は話をするわけだ。だけど、うそを言っちゃ駄目じゃないかって、そういう理性的な反応をすると、どんどん、どんどん、子どもの心は遠ざかってしまう。そういうお父さん、お母さんはね、子どもが思春期になって、学校が嫌や、勉強が嫌いや。また恋愛に悩んで、もうむしゃくしゃするっていうことになったらね、簡単にお父さん、お母さんを裏切って、族になっちゃうんですよ。**

**だけども、小さいころね、うそを言ったときに、うそを言っちゃ駄目じゃないかって言われるんじゃなくって、お父さん、お母さんの共感同苦の世界でね、この子がうそを言うまでにどんなに悩んだだろう。どんなにつらかったろう。どんなに苦しんだだろう。なんでうそを言うところまで放っておいて、それに気が付いてあげられなかったんだろうと思ったりして、ついつい、その苦しさがわかるためにね、うそを言っちゃ駄目じゃないのと叱る前にね、ついその、かわいそうになってしまったりして、その子どもの手を引っ張って、ぎゅっと抱きしめてしまって、ごめんね、許してねって、叫んでしまう。そうしたら、子どもは、うそを言ったのに、抱きしめられて、ごめんねって言われたりしたら、なんでこんなことになっちゃったのかわかんないんだけど、だけど、その心のぬくもりがね、ああ、自分のつらいことをわかってくれてると思うからね、ものすごくうれしくなって、安堵して、安心して、愛されてると思うんですよね。そういう体験を積んできた子どもたちはね、思春期になって、いろんな苦しいことに出合って、ひょっとしたら、ぐれちゃうかしらんというようなときにでもね、このお父さんを悲しませてなるものか、このお母さんを泣かしてなるものかと思ってね、崩れそうになる自分を自分で支えるんですよ。親への愛ゆえに、自分を支えてしまうんですよ。そういう簡単にお父さん、お母さんを裏切ってしまうか。あるいは、このお父さん、お母さんは裏切れないと思うかね。それはそういう心をわかってくれてるか、理性で冷たく対応されたかの違いによって出てくる現象なんですよ。それが愛の力だ。愛は命を救うんですよ。いったんぐれてしまったら、もうなかなか立ち直れませんからね。理屈で対応するのは他人ごとですからね。愛こそまさに命の一体性ですからね。**

**ですから、働いてる人たちに対してでも、やってないことを理性的に冷たく批判したり、注意したりしよったら、なかなかこれ、労働意欲、湧いてこない。だけど、働いてないのにね、いや、頑張ってくれてるね、ありがとうねって言って、ご苦労さんなんて言ってもらったりして、すると、働いてないのに、ご苦労さんって言われてしまうと、なんとなく、じゃあ、働かないかんかなと思ってしまって、働き始めたりしてですね。そのときに、ここのところ、もうちょっとこうしてくれるとうれしいんだけどなって言われると、そうしようかなと思ったりするわけですね。それは愛による導きなんですよね。その人の心がわかる。共感同苦を、愛を優先させて、理性を後回しにするんですね。だけども、そのお父さん、お母さんが、うそを言った子どもに対してね、どんなつらかったろうなと思って、ごめんね、許してねって言って、抱きしめただけじゃ、これはね、溺愛であってね、甘やかしであってね、子どもを堕落させる愛なんですよね。それだけで終わってしまったんじゃ、愛は理屈を越えておることにならない。それは理屈抜きの愛だ。人間の愛は理屈を越えてなければならない。人間には理性があるんですからね。**

**だから、ごめんね、許してねって言って、そのつらさをわかってあげてですよ、それから次にね、だけど、うそを言っちゃ駄目なのよって言うと、じわっとその言葉が染み込むんですよね。反発しないんですよ。だけど、最初にね、うそを言っちゃ駄目じゃないかとか叱るとね、むかつくわけですよね。なんでお父さん、お母さん、俺のつらさをわからんのやという気持ちが残ってしまってね、それが、心が離れてしまう原因になってしまう。愛は理屈を越えたものであって、理屈抜きじゃない。理屈抜きの愛は溺愛であって、甘やかしの愛であって、堕落させる愛だ。人間を堕落させる愛だ。人間を育てる愛は理屈を越えてなければならない。理屈を越えてるということは、理屈よりも愛を優先させることなの。あとに理屈を付けることは人間への教育なんだ。その後先をね、逆転させてしまったら、これは人間を育てるということができなくなってしまう。でも、とにかく優先しなきゃならんのは、共感同苦の世界、感性の共鳴、心の共鳴なんですよ。だけど、それだけで終わってしまったら、これは堕落させる愛だ、甘やかしの愛だ。その次に理性の厳しさ、理性の力を加えることによって、初めて人間ができる。それが愛の力ということですね。理屈を越えた深い愛というのはそういうものなんですね。**

**その次は、意志の力というか、不撓不屈の意志が人間を感動させる。不撓不屈の意志とはなんなのか。どんな困難でも乗り越えていくぜという、そういう不撓不屈の意志はどうしたらできるのか。意志の強い人間というのは、理性的な人間じゃないんですよ。理性的な意志の強さというのはね、自分のしたいことは我慢して、しなければならないことができるっていう、そういう状態が理性的な意志の強さの段階であって、これまでのね、意志に対する理解というのはそういう理解で、意志の強い人間というのは我慢できる人間でね、我慢できない人間は駄目なんやと言われておったんですよ。だけど、そういう意志の強さ、理性でつくった作為的な意志の強さだから、人間的には限界があるんですよね。何か我慢して何かをするということは、我慢せないかんものがあるだけ、もう限界があるわけだ。だけど、人間が人生において求める意志の強さというのはね、不撓不屈の意志。どんな困難でも乗り越えていくぜというようなもんだから、理屈抜きのところにその根拠を持ってないとね、本当にどんな困難でも乗り越えていくっちゅうのはできない。**

**じゃあ、その意志の強さの理屈抜きになる根拠とはなんなのか。それは命から理屈抜きに湧いてくる欲求の強さ、欲望の強さ、興味や関心や好奇心の強さだ。ということは、本当に意志の強い人間というのはなんなのかといったら、それは欲望の強い人間だ。欲求の強い人間だ。興味や関心や好奇心や認識欲や幸福欲の強い人間だ。それがどんな困難でも乗り越えていくという力をね、人間をつくってくれる。本当に意志の強い人間になりたいと思ったら、欲求の強い人間にならないといかん。欲望の強い人間にならんといかん。欲望の強さを恐れてはならないし、欲望の強さを卑下してはならない。駄目やと思ったらいかん。欲望の強い人間こそ、まさに意志の強い人間なんだ。だから、成功した人間というのはね、本当にね、並外れた欲望の持ち主なんですよ。並外れた欲求の持ち主なんですよ。学校の中でも、学者の研究というのは、いかにも理性でやってるように見えるかもしれませんけどね、だけど、ちゃんとした成果、業績を上げる学者はね、並外れた興味や関心や好奇心の持ち主なんだ。並外れた認識欲の持ち主なんですよ。並の認識欲じゃ、研究を最後までね、成し遂げることはできない。並外れた興味や関心や好奇心や認識欲を持ってるからね、結果が出るまでやめられないんですよね。どうしてもと思うからね。**

**どうしてもというのは、これは命から湧いてくる欲求ですからね。とにかく意志の強い人間というのは、欲望の強い人間、欲求の強い人間。興味や関心や好奇心の強い人間なんだ。それが感動を呼ぶんですよ。なんでこんなつらさが乗り越えられるんだろう。なんでこんなつらさに耐えられるんだろう。それは命から湧いてくるものがあるから、耐えられるんですよ。人間は命から湧いてくるようなね、そういう夢や希望やら、理想というものを持ったならば、どんな苦しみにも耐えられる。夢さえあったならば、人間はどんな苦しみにも耐えられる。夢がなくなってしまったらね、人間は苦しさに押しつぶされてしまって、負けてしまうんですよ。だけど、燃えるような夢があったらね、人間はどんな苦しみでも耐えられるんですよ。現在の苦しみに耐えられるかどうかは、自分の人生の未来に燃えるような理想、燃えるような夢、燃えるような希望があるかどうかなんですよね。燃えるような希望があったならば、人間は現実のどんな苦しみにも耐えられる。それが耐える力。耐える力とは未来における燃える理想なんですよ。希望なんだ、夢なんだ。夢がなくなってしまったら、必ず現実の苦しさにつぶされてしまうんですよ。耐えられなくなってしまうんですよね。だけど、本当の希望とか、本当の理想とかね、本当の夢というのは、これは命から湧いてくるもんなんですよ。俺はどうしてもこうなりたい。俺はどうしてもこれがしたい。それは命から湧いてくる理想だからね、必ず実現できるんですよ。頭で考えた理想は自分を縛りますからね。自分が支配されてしまって窮屈になりますからね。実現できません。欲望と結び付いたときのみ、目的は実現できるんですよ。**

**だけど、なかなか、その命から湧いてくるものがないというのがね、現実なんですよね。どうしたら、その命から湧いてくるものが出てくるのか。何がしたいのかわからへんと。命から湧いてくるものをつくる原理はなんなのかといったら、これはあれ、人間の心。人間の心というのは、これは意味と価値を感じる感性ですからね。意味を感じないと、やる気にならない。価値や素晴らしさを感じないと、命は燃えてこないんですね。だから、自分の中から、何かしら、湧き出てくるものをつくろうと思ったら、われわれは理性を使って、物事の意味や価値や値打ちや素晴らしさを考えないと、その意味や価値を感じる感性がなかなか成長してこないんですね。今、自分でやってる仕事の意味や価値や値打ちや素晴らしさを理性で考える。この仕事にはこういう価値がある。この仕事にはこういう素晴らしさがある。この仕事はこういう値打ちがあるんだということを理性が考えるとね、その理性が考えた意味や価値や値打ちや素晴らしさを感じる感性がだんだん成長してきて、感性がその素晴らしさを感じたとき、興味が出てきて、関心が出てきて、欲求が湧いてきて、やろうかな、やりたいなという気分になってくるんですよね。それが命から湧いてくるものをつくる原理だ。**

**とにかく、意味のないことをやったらいかん。意味を感じないと、やる気が出てこない。そのためには、われわれ、自分の理性を使って、物事のより高度で、より深い意味や価値を感じる力をつくっていく。そうすれば無限に欲求が湧いてくるんですよ。興味、関心を湧き出させる方法をね、自分でちゃんと知っておって、それを使いながら、自分を励ましながら、人生をつくっていくというのが、まあ、人間の生き方ですからね。まあ、とにかく感動を呼び起こすようなね、意志の力、不撓不屈の意志、どんな困難にも負けない、湧いてくる意志の強さ。これは欲求の強さだ。命から湧いてくるものが強くならないと、不撓不屈の意志を持てないと。理屈抜きに湧いてくるものがあって、初めてわれわれ、理屈を超えた生き方ができる。理屈を超えた仕事ができると。そういう状態になるわけですね。**

**次は人間性ですね。人間性の魅力。人間性というのは、これはなんなんですかといったら、人間性というのは、性格という格と人格という格の絡み合いが人間性なんですよ。人間性というのは性格と人格の絡み合いである。あいつは人間性が悪いという場合、だいたい性格が悪いというような意味で使われてる場合が多いんですよね。性格というものはね、性格というものにはマイナス面とプラス面があるんですよね。どんな物事にも必ずプラスの面とマイナスの面がある。マイナスの面が出てきたら、これは他人から非難されてね、悪くなってしまうんだけど、物事のいい面を引き出せば、それは評価されて、そして、自分も幸せになっていく。人間の生き方の基本は、どんな環境でも自分の人生にプラスになるように、理解し、解釈し、受け止めていく力が人生をつくっていく力なんですよね。**

**よく女性の方が言われるような言葉で、こんな女に誰がしたっていうのは、あれは環境に負けてしまってね、こんな環境だったから、私はこうなっちゃったのよと。こんな人と結婚しちゃったから、私はこんな女になっちゃったのよって、これは環境に負けた証明なんですよね。人間が人生を生き抜いていくというか、自分が幸せになっていこうと思ったらね、どんな環境でも、自分にプラスになるように解釈し抜いていく力を持たないと、自分で自分の幸せをつくっていく力は出てこないんですよ。幸せになりたいと思ったならば、あらゆることを自分にプラスになるように解釈する力が大事なんですね。それが自分を幸せにし、また自分が自分の人生の幸せをつくっていく実力を持つことなんですね。それがないとね、ついつい事実や環境に自分が支配されてしまって、こんな環境だからしょうがない。こんな不況だからね、もうからんのは当たり前やという、そういう因果列に取り込まれたね、そういう因果のしがらみに絡みつかれる人生になってしまうんですよ。だけど、不況だから何ができるか。不況だから、こういうプラスがあるというね。そういう発想で経営をしないと、本当の経営能力は成長しないんですよね。好況のときにみんながうまくいってるのは、これは当たり前のこんこんちきですから、不況のときこそ、経営力が発揮されると。経営力というのは、いかなる環境もね、その自分の業態にとってプラスになるように解釈し抜いていく。それが経営力なんですね。**

**人生でも、どんな環境でも、どんな事実でもね、必ずプラスの面とマイナスの面があるんだ。マイナスの面を見始めたら、もうこれは駄目になってしまう。そのプラスの面はなんなのかということを見抜いてね、どんな環境でも、どんな事実でも、自分の人生にどうしたらプラスにできるのか。どういうふうに理解したら、それが自分の人生のプラスになるのかということの解釈力がね、自分を幸せにしたり、不幸にしたりするわけであります。性格にも、そういう意味ではプラス面とマイナス面があると。だいたいあいつは気が短いっていう評価をする人間はその人が嫌いなんですよね。だけど、あいつは決断が早いっていう人間は、その人が好きなんです。決断が早いというのとね、気が短いというのは、同じような現象に対する評価なんですけども、嫌いだと気が短いという非難になってしまって、好きだと決断が早いというプラスの評価になるわけですね。どんなことでも必ず、マイナスにも評価できるし、プラスにも評価できる。プラスに評価すれば好きになって、自分も幸せになる。マイナスに評価したら、自分はそのことを嫌いになって、その人を嫌いになって、不幸になったりします。幸不幸は自分が決めるんですよね。環境がこうだから、自分は不幸だというんじゃないの。自分の不幸は自分がつくってる。自分の幸せも自分がつくってる。それが実態なの。不幸になる人間は自分で自分を不幸にしてるんですよ。幸福になる人間は自分で自分の幸福をつくってるんですね。それが実は人生を生き抜く力、いかなる現象も、いかなる事実も、いかなる環境も、自分の人生に、自分の仕事にプラスになるように解釈したら、自分はどんだけでも幸せになれる。それが幸せをつくっていく実力なんですね。**

**性格にもやっぱり、そういう面でプラスの面とマイナスの面がある。性格の持ってるマイナス面が出てくるとね、嫌がられてしまう。人間性が悪いって言われる。性格というのは、これは自分ではどうしようもないもの。こんな性格になろうと思ってなった人間は誰もいませんからね。気が付いたら、こんな性格になっちゃってたんですよ。性格はなっちゃうもんですからね、なっちゃうもんだから、これはなっちゃうものは、なっちゃうままに放っておくよりしょうがないんですよね。なっちゃうものをね、なっちゃうもの、なっちゃんというジュースもあるんですけども、なっちゃうものをね、なんとかしようと思ってね、作為的にどうのこうのしようと思うと、病気になってしまうんですよ。病気になっちゃったりして。そのなっちゃうものは、自然になっちゃうもんですから、これはもう、なっちゃうように放っておくよりしょうがない。その性格の持ってるマイナス面がね、あんまり出てこないようにするということが人間性の努力なんですよ。**

**じゃあ、どうすれば、性格の持ってるマイナス面があんまり出てこないで、性格の持ってるプラス面が出てくるのかといったら、それは、性格はもうこれは自然になっちゃうもんですから、放っておくよりしょうがないので、性格を抑えたら病気になりますから、だから、性格の持ってるプラス面が出てくるようにしようと思ったら、人格的努力をしなければならない。人格というのは、これは自分で自覚的につくっていくもんなんですよね。人格を持って生まれてくる人間はいない。人間が生まれてきたときには、これはみんな、動物学上における人類として生まれてくるのであって、生まれたときには人格はない。人間は生まれてからのちに、自らも努力をし、社会の中で教育を受けて、人間の格を獲得して人間になるんだ。人格は自分でつくっていくもんだ。だから、性格の持ってるプラス面を出てくるようにしようと思ったならば、人格に対する努力をすることによってそうなる。人格的、人格の努力をするとどうなるかというと、性格の持ってるゆがみが修整されて、性格の持ってるマイナス面があんまり出てこないようになるんですね。**

**じゃあ、人格を磨くとはどういうことなのかといったら、人格というものには、高さ、深さ、大きさって、３つの次元がある。人格の高さを求め、人格の深さを求め、人格の大きさを求めていくという努力をすると、だんだん、だんだん、段々畑でですね、だんだん、だんだん、段々畑で、性格の持っとるマイナス面があんまり出てこないように、だんだんなってきて、性格の持ってるプラス面ばかり、目立ってくるもんですから、なんとなく人間性がよくなったように見えるんですよね。性格は変わらないんだけど、人格的努力をすると、性格のゆがみが修整されて偏りが修正される。性格が持ってるマイナス面があんまり出てこないようになってきて、人間性がよくなって、好かれるようになってくる。だから、なんか、自分の人間性があんまりぱっとしないなと思う人はね、とにかくは人格的努力をすると、自分の人間性に輝きが出てきて、人間性、魅力が出てきて、そして、なんか他人から好かれるようになってくるって、そういう状況になります。そのためには、われわれは人格の高さを求め、人格の深さを求め、人格の大きさを求めていくという努力をセントバーナードなんですね。これ、人格の高さをつくるためにどうするかとかってね、人格の深さをつくるためにどうするとか、人格の大きさをつくるためにどうするかという話も、またこれ、３時間ずつあったりなんかして、今日はちょっとこれはもう話せません。また来年にでも、もし講座をつくっていただけるようなら、またのちの段階で、その話もぜひさせてもらいたいと思いますけども、今日は愛の話ですからね。**

**肉体的魅力をどうつくるかということ。もうちょっとで休憩に入りますが、もうちょっと我慢してくださいね。肉体的魅力というものにも３つあるわけですね。肉体的魅力という観点から感動を与えようと思ったら、また３つの内容がある。肉体的魅力というのは、もうこれはもう、言わずと知れた肉体的魅力でね、もう皆さん方もぱっと、頭に思い浮かばれることは、全部それ、入ってくるわけなんですけども、とにかくは、そのプロポーションとかね、外見的な魅力というのは、これはみんな、肉体的魅力に入るわけなんですけども、そういうプロポーションとか、髪型とか、服装とか、ネクタイとか、お化粧とか、そういうもの全部、引っくるめて、これ、容姿というふうにね、言うことができる。人間は容姿という魅力を持っておる。だから、容姿という魅力において自分を輝かせようとするのも、大事な人間的努力なんですよね。**

**２番目の肉体的魅力は、目の魅力、表情の魅力、態度の魅力。目を磨き、表情を磨き、態度を磨く。これもやっぱり、肉体というものが持っておる魅力をつくっていくことの大事な原理なんですよね。目に輝きを。だから、人間が人間を見る場合には、常に目に愛がなかったらいかんと。何かしら、非難する目、批判する目、否定する目、相手を責める目、これほど嫌な、魅力のない目はないですよね。相手を尊敬し、たたえ、感謝し、評価し、愛する目で見れば、どんだけでも人間関係は素晴らしくなっていく。自分の目を鍛えることは、ものすごく大事なこれは肉体的努力の一部分であります。あと、表情を鍛えていく、態度を鍛えていく。それでどんだけでも自分は輝くんですよね。目を鍛えない、態度を鍛えようとしない、表情を鍛えようとしなければ、どんだけでも自分の魅力は減ってしまう。これだけでも大違いですよ、本当に。容姿の魅力、それから目、表情、態度の魅力。**

**３番目は、立ち居振る舞い、これは行動の美学というんですけども、立ち居振る舞いの魅力。動きになんかしら、ぞくっとくるような魅力がある。これは、よく黒人のね、歌手の方が、舞台に立たれると、ちょっと手をぱっとこうするだけで、なんかぞくっとするんですよね。なんかしら、そういう、ちょっとした体の動きがね、なんかしら、ぞくぞくっとするような魅力を感じさせるというのはよくあるわけですよね。日本のアーティストで、あんまりああいうことはないんですけど、西洋人とか黒人の方がね、ちょっと足を、ちょっと動かすだけでも、なんかぞくぞくっとしてきたりなんかして、なんかすごい魅力を感じるんですよね。そういうのは、やっぱり、これは努力してつくっていく、そのステップとかね、なんかちょっとした、動き。振付師の方がね、そういうものを、考案されるんでしょうけども、ちょっとしたそういう動きの中にね、何かしら、もう言いようのない魅力があるという、そういうことがあるわけですね。**

**日本人でも、昔から行儀作法の中でね、そういう立ち居振る舞いの魅力というのをつくってきました。最近はもう、合理主義って一点張りですからね。だから、障子を開ける場合でも、もう立ったままでぱっと開けてしまったりね、ひどい場合には足で蹴飛ばして開けてしまったりなんかして、非常に行儀が悪いというようなことを言われるんですけど、ちょっと無駄なようでもね、ちょっとしゃがんだりなんかして、すっと、障子をこう開けると、なんとなく、そこにほんわかとした、いい雰囲気が漂うみたいなね、なんかそういうゆとりというか、美学が出てくるという。だから、自分の立ち居振る舞い、行動の中に美学をつくるということも、また人を感動させる、ものすごく大きな原理なんですよね。そんなことも考えてもらいたい。**

**とにかくは、人間的魅力の形成ということを考えると、そういう理性的魅力、感性的魅力、肉体的魅力、そういう要素があって、各それぞれに３つの感動の要因がある。そのことを考えながら、ぜひ、その自分の魅力づくりということを考えてもらって、それがまた非常に悪くなってしまった人間関係を修復する。敵方をも感動させるみたいなね、そういうふうなものが出てくるということがあるわけであります。ぜひ、そんなことを、考えてみてもらいたいと思います。ここで、じゃあ、10分間ほど休憩を入れさせてもらって、あとの残りの話を次にさせてもらいます。どうもありがとうございました。**

**司会：はい、それでは、これから10分間の休憩に入ります。座ったままで、姿勢を正して、はい、これより10分間の休憩に入ります。ありがとうございました。**

**一同：ありがとうございました。**

**（休憩）**

**司会：はい、それでは時間となりましたので、研修のほうを再開いたします。座ったままで、姿勢を正して、はい、これより、月曜集合研修のほう、再開します。お願いします。**

**一同：お願いします。**

**司会：じゃあ、先生、お願いします。**

**芳村：それでは、先ほどの続き、今度は第３番目の、悪化した人間関係を修復する実力をつくる、第３番目の原理。今度は対立を乗り越える実力ということですね。これが、悪化した人間関係を修復するための愛の力の中心になるテーマで、対立を乗り越える実力。対立を乗り越える実力とは、どういうふうにしたらできるのかということを、考えるために、まず対立とはなんなのかということを考えなければならない。対立とはなんなのかということなんですけども、対立というのは、これは、考え方が違うから、あるいは立場が違うから、感じ方が違うから、人間性が違うから、違いを原理にして対立が出てくるのでね、同じ考え方なら対立をしないと。同じ立場なら対立しない。だから、違いが原因で対立をするわけですね。その対立を乗り越えていこうと思ったら、どうするかっていったら、これは違うから対立をするんだから、同じようなものを、持つように近づけていったならば、対立はだんだんなくなってくるという、理屈になるわけですね。**

**じゃあ、どうするのかといったら、対立するということは、自分にないものを相手が持ってるということが原因なんですよね。ということは、考え方の違いというのは、なんでできてくるんですかっていったら、考え方の違いというのは、これは生まれながらに、あいつの考え方は気に食わんということはないんですからね。だから、考え方の違いは後天的にできてくるもんだと。じゃあ、後天的にできてくるものは何が原因なのかといったら、生まれてからのちの体験の違い、経験の違い、学習内容の違い、出会いの違いですね。体験の違い、経験の違い、学習内容の違い、それから、出会いの違い。この４つが、人間の考え方が違ってくるという原因であります。体験と経験というのは、これ、よく似ておって、同じじゃないかと思ってる方もいらっしゃるかもしれませんけど、体験と経験は次元が違うんですね。体験というのは、これは自分の肉体が外の世界と関わった事実のことを体験というんですけど、経験というのは、その体験から自分は何を学んだかという意識の内面の問題なんですよね。同じことを体験しても、その人間の持っておる知識や技術のレベルとか、あるいは、人格の違いによって体験から何を学ぶかは全然違ってきます。ですから、経験と体験は次元が違うもんでね、体験というのは、これは自分の肉体が外の世界と関わった事実なんですね。だから、経験というのは意識の内容であって、体験から何を学び取るかというね、その学び取った内容が経験なんですね。**

**あと、学習内容の違い、何を勉強したかですね。どういう本を読んだか、どんな勉強をしたかによっても、考え方の違いはできてきてしまうと。あとは出会いですね。どんな本と出合ったか、どんな先生と出会ったか、どんな事件と出合ったか。そういうさまざまな出会いというものが、また人間の考え方を変えていく。違いというのは、そういうものが原因で違うものが出てくる。だから、考え方が違うということは、なんなのかといったら、自分にない体験を相手が持っておったり、自分にない経験を相手が持っておったり、あるいは、自分と違う勉強をね、相手がしておったり。あるいは、自分が持ってないような出会いを相手が持っておったりというのが、それが、考え方の違いができてくる原因であります。人間が成長しようと思ったならば、自分と同じものを持ってる人間と付き合っても成長しませんから、自分にないものを持ってる人間と出会って、自分にないものを相手から学び取るということが、成長の原理ですよね。そのことを、まず踏まえて考えなければならない。**

**対立というものは、自分にないものを相手が持ってるから、対立が生じるんだ。こうして、自分にないものを相手から学び取らなけりゃ、自分は成長しない。同じものを持ってるような、同じ趣味や、同じ立場の人間と付き合っても、人間はさしたる成長はしない。そのことを対立ということを原理にして、まずは考えてみなきゃならない。だけども、対立ということで一番問題なのは、考え方が違うという、そのこと自体ではないんですね。対立で一番問題なのは、感情的対立なんですよ。感情的に対立するということがなかったならばね、考え方が違ってもそう大きな問題にはならない。というのは、感情的にさえならなければね、そんな考え方もあってもいいんじゃないの。俺は違うけどねといって、突っぱねておくこともできるんですよね。だから、感情の問題が絡んでくると、対立は泥沼になってしまうと。だから、まずその悪化した人間関係を修復するということにおいて一番大事なのは、感情的対立をどう乗り越えるかという実力なんですね。感情の問題をさばくことができたならば、あとの問題は、そう大きな問題ではないということもないんだけども、比較的ですね、対応はできるんですね。**

**そこで、まず一番最初の、対立を乗り越える実力というのは、感情的対立を乗り越える実力ということを、考えなければならない。感情的対立というのは、どういう構造になっているかというと、感情的対立というのは、自分が相手に対して感じる敵対心、対立心、反感と、それから、相手から自分に向けられてくる敵対心、対立、反感という、両方の方向性があるわけなんですよ。ですから、感情的対立というものをさばいていこうと思ったならば、まずは、自分から相手に対して感じる敵対心、反感、対立心というものをまずなくしていって、乗り越えていって、その次に、今度は相手から自分に向けられてくる対立心、敵対心、反感というものを除去していくという順序でやっていかないと、感情的対立というものをなくしていったり、乗り越えていったりすることはできないんですね。そこで、まず自分から相手に対して感じる敵対心、反感、対立心というものをなくしていこうと思ったらどうするかということなんですけども、そのためには、一番大事なのは、対立という現象をどう自分が解釈するかなんですね。**

**これまで人類は、対立という状況が出てくると、５つの方法でしか対応できなかった。これまでの人類の対立という状況に対する対応方法というのは５つあって、まずは違った考え方に出合ったら、説得を試みるわけですね。説得して、相手を自分と同じ考え方にしてしまおうと思ったりする。説得できないと、次は妥協点を模索すると。妥協も成立しないと、相手が強力で強いと思ったら、もうこびへつらってしまって、相手に服従するしかないと。あるいは、服従できなければ、相手から逃げるというね、そういう対応を取る。それもできなくなってしまったら、逃げられなくなってしまったら、最終的には、窮鼠猫をかむというか、相手がどんなに強いと思ったって、とにかくもう、向かっていくっきゃないというんで、戦争だ、けんかだとなってしまうと。５つの方法がね、これまで人類が対立という状況に対して取ってきた対応方法であった。だけど、これではなかなか今日の状況においても戦争はなくなりませんし、また人間同士の対立という状況は解消できないというのが現状であります。**

**じゃあ、どうすれば、いったい感情的対立というものを、克服して、そして、その考え方が違っても和していけるという状況に持っていくことができるのか。といったら、これまでにない新しい対立に対する解釈というものをね、つくっていくことなしには、対立は乗り越えられない。じゃあ、どういうふうにすれば、感情的対立というものを、自分から相手に対して感じる感情的対立というものをなくしていくことができるのかといったら、対立をどう解釈するかということになるわけですね。それで、新しい対立に対する解釈というものをわれわれは見つけ出していかなければならないと。そこで、先ほど申し上げたことを思い出してもらいたいんですけども、対立というのは、相手が自分にないものを持ってるから対立するんだ。自分が成長しようと思ったならば、自分にないものを相手から学ばなければならない。そのことを基本的に考えるならば、われわれは対立というものをどう解釈するかといったら、対立をするということは、これは自分が成長するために学び取らなければならないものを持ってる人間が誰であるかを教えてくれる現象が対立である。**

**われわれは、対立を経験することなしには、自分が成長するために学び取らなければならないものを持ってる人間が誰であるかを知ることはできないんだ。対立しないような人間とばっかり付き合っておったんでは、自分が学び取るべきものはない。対立という現象は、自分が教えてもらわなければならないものを持ってる人間が、今、俺の目の前におるんだということを、教えてくれる現象が対立なんだ。われわれ、対立を経験することなしには、自分が学ぶべきものを持ってる人間と出会えない。そういうふうに、対立というものを解釈する力ができてくると、だんだん、だんだん、だんだん、だんだん、段々畑でですね、相手に対して敵対心を感じたりね、相手を敵だと思ったりね、相手に反感を感じるという、そういう心情がなくなってしまうんです。だんだん、だんだん。いっぺんには消えませんけどね。いっぺんには消えませんけど、自分と考え方が違うっていう、そういう状況が出てくると、ああ、この人は自分にないものを持ってるんだと。だから、自分が成長するためには、この人から何かしら教えてもらわないかんのだなということがね、理性的にだんだんわかってくると、そのことによって、相手に対して対立心を持って、反感を持つという気持ちがだんだん少なくなってきてね、いつしか、その相手から何かしら、自分にないものを教えてもらおうという、そういう気分に自分はなっていくんですね。それが、自分から相手に対して感じる敵対心、反感、対立心というものを少しずつ除去していく方法なんですよ。**

**これはもう解釈の問題ですからね、そういう意識になれるかどうかだけの話なんですよね。自分と違った考え方や立場や、自分と違った人間性に出会った場合に、相手は自分にない体験を持ってるんだ、相手は自分にない経験をしてるんだ、相手は自分にない勉強をしてるんだ、相手は自分にない出会いを持ってるんだ。だから、自分にないものを相手から教えてもらおうと。そういう気持ちになったら、だんだん反感はなくなってしまうんですよ。それが自分を、感情的対立という意識から救う方法なんですよね。感情的対立をなくしていこうと思ったらね、まずはね、自分が相手を見るときに、相手を敵やと思う目で見つめておったら、これは絶対、対立はなくなりませんから、だから、相手を敵やという目で、相手を見る目をね、まずは消去せんないかんと。相手を敵やという目で見る、その目を消去するためには、自分の意識を変えんにゃいかん。意識が変わったら、目が変わるんですよ。意識が変わったら、自分が相手に対する態度が変わるんですよ。自分の意識が変わったら、相手に対応するときの自分の表情が、がらっと違ってくるんですよ。それが、まずは感情的対立というものを自分のほうからなくしていくための第1原則である。自分が相手を見るときの、目つき、表情、態度の中に、相手を嫌やなと思ったり、敵やなと思ったり、あるいは、反感というものをね、感じるということがなくなっていったら、次はどうするかといったら、次は、相手から自分に向けられてくる敵対心、対立心、反感というものを除去していくという順番に入ると。**

**じゃあ、相手から自分に向けられてくる敵対心をなくしていこうと思ったらどうするかといったら、とにかく基本は、まず自分が相手を見る目の中に敵対心をなくしておかないと、次の順番に入れない。それができたら、次はどうするかといったら、次は、今度は、人間というものは、どんな人間でも愛されたいんだ。認めてもらいたいんだ。わかってもらいたいんだというね、よい人間関係をつくる実力の第1原則を思い出さなければならない。相手から自分に向けられてくる敵対心を除去しようと思ったら、まずはその３つの意識をまず前提としてつくっていかなければならない。その第１番目の意識はなんなのかといったら、どんな人間でも、みんな愛されたいんだ。どんな犯罪者でもね、どんな人でも、とにかく愛されたいんだ。それから、またどんな人間でも認めてもらいたいんだ。また自分のことをわかってもらいたいんだ。みんな、その気持ちを持っておる。愛されたくない人間はいない。認められたくない人間はいない。わかってもらいたくない人間はいない。みんな愛されたい、認めてもらいたい、わかってもらいたいんだ。その気持ちをみんな持ってるんだということをね、まず思い出さなければならないと。**

**それから、２番目は、自分と違うものに対して、違うから嫌やと思うんじゃなくってね、違うものに対して、自分と違った考え方に出合ったならば、なんでそういう考え方ができるんやろうな。なんでそういう考え方をするようになったんやろうな。俺は知りたいというね、違うものに対して興味や関心や好奇心や認識欲を持つという気持ちができてくるかどうかですね。違うから知りたい。なんで違うんやろうなという、そういう気持ちがね、持てるという、そういう状態になれるかどうかが、次の意識の成長であります。異なるものに対して嫌やなと思ってしまうんやなくて、異なるものに対して興味や関心や好奇心を持つこと。なんでやろうな、俺は知りたいという、そういう気持ちを持つことですね。**

**３番目はですね、３番目の意識の転換は、これは自分と考え方の違う、こいつのことを本当に誤解することなく、ちゃんと理解することができる能力と人間性を俺の中につくっていかんと、俺はビッグな人間に成長できない。俺が人間的に成長するためには、こいつのことをちゃんとわかることができる能力と人間性を俺の中につくらんと、俺はビッグになれないというね、そういう自己中心的な成長意欲を持つことなんですよ。相手のために相手のことをわかってあげましょうって、そういう親切ごかしの善人根性じゃ、厳しい対立を乗り越えられないんですよ。厳しい対立を乗り越えるためには、俺のためになるんやと。俺が成長するためにどうしてもこれをせんにゃいかんのやと思わないと、厳しい対立は、乗り越えられないんですよ。相手のためにね、わかってあげましょうというような気分だったらね、そんな善人根性だったらね、相手がそれを拒否すれば終わりですからね。自分がでかい人間になるために、自分が成長するためには、こいつのことをちゃんと理解することができる能力と人間性を俺の中につくっていかんと俺は成長できんという、そういう自分が成長したいという気持ちが根底になかったならば、厳しい対立は絶対に乗り越えられません。親切心でね、善人根性じゃ弱い、まだ。**

**とにかく、厳しい対立、悪化した人間関係を修復するというような、そういう意味での、対立を乗り越える実力というのをつくっていこうと思ったならば、相手から自分に向けられてくる反感を除去する。これはものすごく困難で難しいことかもしれませんけど、だけど、やったらごく簡単なんですよ、これはね。やる気になったら。とにかく、まずは３つのことを、まず自分が知ることです。人間というのは、どんな人間でも愛されたい、認めてもらいたい、わかってもらいたいんだ。その次は、違うということに対して嫌やなと思うんやなくって、なんでやろうな。俺は知りたいという、そういう気持ちを持つことですね。３つ目は、この俺がビッグになるためには、俺が成長するためには、あいつのことをちゃんと理解することができる能力と人間性を俺の中につくっていかないかん。どうしたらこいつのことを理解できるか。そういう気持ちにね、自分がならにゃいかん。この３つが、まず、相手から自分に向けられてくる対立心というものを除去していくことの前提条件。**

**じゃあ、どういう実践をするのかといったらね、違った考え方の人間に出会ったならば、どうもあなたと私は考え方が違うようですね。どうして、あなたがそういう考え方をされるようになったのか。本当に私は知りたいんです。教えてくださいと言ってね、相手の考え方を教えてもらうと。そういうふうにして、自分が何かしら、相手に質問するんですよね。そのときにね、なんか変なことを言ったら突っ込んでやるぞというのは、そういう敵を見るような目で見とったら、もう相手はしゃべってくれませんからね。そのために、まずは自分から相手に対する反感を取っておかないかんと。取っておいてからね、先ほど申し上げた３つのことを自分の意識の中につくっていく。そして、相手に質問をする。そしたら、相手の目の中に反感がないからね、だから、案外、質問したことはしゃべってくれるんですよ。しゃべってもらったら、どうするかといったら、必ず、ああ、そうだったんですか、そんなことをされたんですか、そんなことがあったんですか、なるほどねと、聞くわけですよね。ちょっとでもね、だけどと言ったら、もう駄目なんですよ。しかしと言ったら駄目なの。でもと言ったら駄目なんですよ。だけど、でも、しかしは禁句なんで、絶対、言ったらいかん。だけどと言ったら、もう相手は言うことをやめてしまう。もう聞く気はないんだなと思ってね、しゃべりたくなくなってしまって、心を閉じてしまう。だから、どんなことを相手が言ってもね、ああ、そうなんですか。ああ、そうだったんですか。ああ、そんなことを勉強されたんですか、なるほどねってね、全部、肯定的に受け止めるということがね、初めて本当に相手を素直な心で理解して、相手のことをわかろうとする、その努力の気持ちなんですよね。**

**これは、精神療法家とか、あるいは、心理カウンセラーがね、心の病を持った人間に使う方法なんですよ。反論をしない、絶対に。全部肯定的に受け止めて聞き入れる。これはもう心理カウンセラーとか、精神療法家がね、そういう心の病を持った人間の心を癒やすために使う方法なんですよ。それをわれわれは、自分に対して敵対心を持ってる人間に対して使わなければならない。そういうふうにして、ずっと、そうだったんですか、なるほどねと聞いていってね、最終的には、ああ、だから、あなたはそういう考え方をされるようになったんですね。よくわかりましたと言ったら、もうそのころにはね、相手が自分を見る目の中に敵対心は全然なくなってしまってるんですよ。少しずつ、だんだん消えていってね、だから、あなたはそういう考えをされるようになったんですね。よくわかりましたと言ったら、相手もうれしいですからね。もうこちらを見る目の中に敵対心はないんですよ。そういうふうにしてできてくるね、人間の大きさ、そういうふうにしてできてくる対立を乗り越える実力のことをなんと言うかというと、器が大きいと言うんです。まずは、対立を乗り越える実力をつくっていこうと思ったならば、器の大きさというものをつくっていくことが第1原則で、それが土台なんですね。器の大きさというものができてこないと、対立を乗り越える力が出てきません。器が大きいということは、どんな人のことでも全部受け入れることができる。入れ物が大きいということなんですよね。どれほどの大きな入れ物を持ってるかによってね、どれだけのたくさんの人を自分の懐に包み込めるかが決まってくるんですよ。そういう器の大きさをつくっていくと、どういうことになるかといったら、社会的評価としてはね、あいつはこの任に値する器だという、そういう評価がね、どんどんされるようになってくるんですよ。多分、あいつに任せておいたら、これ、やってくれるだろうというね、そういう、あいつはこの任に値する器だという、そういう認識がね、他人からもらえるという、そういう状況の人間になれるんですよ。器の大きさというのは可能性を感じさせるんですね、可能性を。**

**その可能性をつくっていくってどういうことなのかといったら、相手のことを誤解することなく、ちゃんと理解することができる能力と人間性なんですよ。これは社会をね、生き抜く社会性の基本というのはなんなのかといったらね、社会を生き抜く社会性の基本は、相手の言うことをちゃんと理解する能力と、自分のことをちゃんと相手にわかってもらえる能力というのが社会性なんですよ。社会性とは、相手の言うことを、相手のことを誤解することなく理解する力と、自分のことを誤解されることなく相手に伝える。この２つが整って初めて社会性というのはできてくるんですよね。だから、どちらが最初、大事なのかといったら、これは相手のことをちゃんと自分が理解してあげることができる。相手のことをちゃんとわかってあげることができる力をつくっていくことが、まず最初でね、自分のことを最初に相手にわからせようとしても、相手のことをわかってあげるという前提がなかったならば、相手はなかなかそう簡単には自分のことを聞いてくれませんからね。まずは社会性をつくっていくというか、現実を生き抜いていく力をつくっていこうと思ったならばね、まず相手のことをちゃんと誤解することなくわかってあげる力というのをつくっていくことが、まずは基本なんですね。それがとにかく対立を乗り越えていくためにも大事な基本なんですよ。だから、器の大きさというものをまずつくらなければ人間は成長しない。要は社会を生き抜く力というのは出てこないんですよね。そういうふうに考えると、感情的対立を乗り越える実力というものをつくっていくと、器は大きくなるわけですよ、まずは。どんな人のことでもちゃんとわかってあげられるというね、そういうこの力ができてくる。それが器が大きいというんですね。**

**だけど、器が大きいだけじゃ、相手のことをわかっただけですからね。今度は本当に現実を生き抜いていく社会性をつくっていこうと思ったら、今度はね、相手のことをちゃんとわかってあげておいた上で、今度は、実は私はこういう体験があって、こういう経験をして、こんなことを勉強して、こんな出会いがあって、こういうふうに考えるようになったんですよということをね、今度は自分のことをちゃんと相手にわかってもらえるっていう力をつくっていかないと、本当の意味での社会性、いや、社会を生き抜く力というのは出てこない。相手のことをわかってあげただけじゃね、これは自分が損ですからね。自分のこともちゃんと相手にわからせる力、自分のことをちゃんと相手に伝える力、相手に誤解されないようにね、自分のことを相手にわからせないと、自分を表現できませんからね。自分の思うような動きを社会につくれませんからね。相手を動かす力というものをつくるためにね、まずはその前提条件として、相手をわかってあげる力をつくっていかないと、自分が相手を動かせないという、そういう順序なんですよね。べつに相手のことをわかってあげたくはないかもしれないんだけど、自分が相手を動かそうと思ったらね、とにかく相手のことをちゃんとわからんことにはね、相手を動かせない。**

**これはもうアメリカの国家戦略の基本でね、アメリカはね、世界を支配したいためにね、外国の文化やいろんなことを研究するんですよ。いかにもね、アメリカ人の行動を見ると、外国のことについて知りたいとか、外国人に対して優しいように見えるかもしれませんけど、本音はね、自己中心的なんですよね。だけど、アメリカ人は全世界に情報網を張り巡らせてね、そして、外国語と国語という、多く研究してるのはね、あれは支配するためなんですよ。それがあまりにもね、アメリカの国家戦略においては見え過ぎてしまうのでね、見え見えなので嫌われるんですけども、だけど、人間が社会を本当に生き抜いていこうと思ったら、基本的にはとにかくは、自分を出していくことができなければ、自分の人生はつくれませんから、だけども、自分の言うことを相手に聞いてもらおうと思ったら、相手のことをまずわかってあげないとね、自分の言うことは聞いてもらえないんですよね。**

**そのために、まずわれわれがつくっていかなきゃならん力は、相手のことを誤解することなく、ちゃんと理解する能力をね、自分がつくっていかないと、社会性の基本はできないと。それが器の大きさをつくるということですね。相手のことをちゃんと、どんな人のことでもちゃんとわかってあげることができる。その器の大きさをつくっておいてからしかね、自分のことをしゃべってはならないんですよ。逆転したら、けんかになります。けんかになるというか、かえって対立を呼んでしまったりね。なかなか事はうまく運ばない。これはもうどんなことでもそうですけど、自分の身にまつわるなんか問題とか悩みが出てきたときにはどうするかといったらね、まずは、俺のどこに問題があったから、こんな問題に絡んじゃったんだろうかということから、まず考えて、それから相手を責めるなら責めるということをしないと、問題は解きほぐれない。自分の絡んだ問題というのは、99％相手が悪い場合でもね、自分が絡んじゃったら、とにかくは、俺のどこに問題があったから、こんな問題に絡んじゃったんだろうか。俺にもこういう問題があった。だけども、君にもこういう問題があるよねというんで、ようやく問題はほぐれていくんですよ。**

**まず自分のどこに問題があったかということを相手に語らないとね、相手はその問題に対して、こちらの気に入るような対応ということをしてくれませんからね。人を責めたんじゃ、これ、責め合いになりますから、相手を責める分だけ、自分は成長できませんからね。とにかくは、まずは自分のどこに問題があったのか。俺にもこういう問題があった。だけど、君にもこういうところはあったよねと言ったら、うんとこう、そうやなと、認めざるを得ないという、そういう順序でね、問題は解きほぐれるんですよね。これもあらゆる問題を解きほぐしていくための原則であります。そのためにとにかくは、まずは相手のことを十分に理解する力、相手のことを十分理解する能力と人間性というのをまず自分がつくっておかないとね、自分のことを相手にわかってもらう力がまた出てきませんからね。**

**器の大きさという、相手のことを十分理解する力をつくったうえで、次にね、私は実はこういう体験があって、こういう経験があって、こんな勉強をして、こういう出会いがあって、こういうふうな考え方をするようになったんですよとこう言うとね、相手のことを十分にわかってあげてるから、相手も聞く耳を持って聞いてくれるんですよね。今度は自分のことを、どんな人にでも誤解されることなく、自分のことをちゃんとわかってもらえる力というのをつくっていくと、今度は度量ができるんです、度量が。器の大きさをつくっておいてからしか、度量の大きさというのはできてこないんですよ。度量が大きいっちゅうのはどういうことなのかといったら、あいつはなかなか度量が大きいという場合はね、あいつはこういう考え方を持ってるのに、だのに、そうとは違う考え方をも認めて許すことができる。なんて度量が大きいんだろうと。そういう評価になるわけですね。度量の大きいという評価が出てくるためには、自分の考えを相手にちゃんとわからせる。どんな人にでも、自分のことをちゃんとわかってもらえる力をつくっていくと、度量という評価に高まってくるわけですよ。器が大きいだけじゃない。度量が大きい。そういう段階になるわけですね。**

**だけど、その器が大きいということは相手のことがわかる力だし、度量が大きいということは自分のことを相手にわかってもらう力という、そういうことなんですけど、まだそこでは考え方の違いが残るんですよね。本当に考え方の違いを乗り越えて、対立を乗り越える実力ということになっていくためには、もう一歩、また上を考えていかんと。じゃあ、器が大きい、度量が大きい、その上はなんなのか。次は包容力ですね。包容力の大きさというものをつくっていかないかん。包容力が大きいということはどういうことなのかといったらね、自分と違う考え方を持っている人間が自分の懐に飛び込んでくるという構造なんですよ。考え方は違うのにね、多くの人間が自分に付いてくる。自分の懐に飛び込んできてくれる。それが包容力の大きさ。包容力が大きいというのはどういうことなのかといったら、包容力の大きな人間というのは、自分と違った考え方を持っておったり、自分と違った立場であったり、自分と違った人間性を持ってる人間をどんだけたくさん自分の懐に包み込めるかというのが、包容力が大きいか、ちっちゃいかなんですよね。**

**しかも、包容力のでかい人間というのはどういう人間かといったら、自分と違う考え方をたくさん自分の懐の中に包み込みながらも、自分がびくともしないと、動揺しない。一般的な社会において、包容力がありそうで、なさそうで、うっふんというのは、どういう状態なのかといったら、ありそうで、なさそうで、うっふんって、いかにも包容力がありそうで、ないというのは、これは自分のことは全部放棄してね、自分のことは横に置いておいて、相手に全部、合わせてしまうんですよ。他人がなんか言うと、ああ、そうですねと言ってね、また他人がなんか言うと、ああ、そうですねって、おまえ、いったいなんなんやって、そういう感じで、全部、相手に合わせてしまって、自分を出さないんですね。いかにも誰とでもうまくやっていってるように見えるんですけど、だけど、それは自分がむなしいんですよね。自分の中に充実感がない。全部、相手に合わせてしまって、うまくやってるんだけど、自分がない。これは、こびへつらえであって、包容力じゃないんだ。本当の包容力というのはね、自分と違う考え方を持ってる人間がどんどん自分の懐に飛び込んでくる。自分と違う考え方を持ってる人間をどんだけ自分のところに包容できるか。しかも、自分がびくともしないと。そういう状態が包容力があるというんですよ。**

**じゃあ、そういうことはどうしたらできるんだといったらね、これは相手のこともわかってあげたというんで器の大きさができて、自分のこともちゃんと相手にわからせたいというんで度量ができて、今度は、自分が相手をのみ込むという、そういう構造をつくっていかないかん。自分が相手にのみ込まれてしまったら、相手に包容力があっても、自分には包容力がないんですよね。どうしたら、包容力の大きな人間になれるのか。どうしたら、違った考え方や立場や人間性を持った人間が、この人に付いていこうというようなことで、自分の懐に飛び込んでくるのか。そのためには、どうするかといったら、相手の考えの中で何かしら、自分が成長するために参考になるような、ものを、相手から学び取って、自分にないものを相手から学び取って、自分の考えを成長させていくということをすると、包容力というのはできてくるんですよ。ただ理解するだけじゃなくて、学び取らないとね、包容力という能力は出てこない。包容力をつくっていくためには、相手のことを十分にわかってあげて、しかも、相手の考えの中にあるもので自分の中にないものをね、相手から学び取って、そして、相手の中にあって自分にないものを相手から学び取ることによって、自分の考え方を成長させるという力を持ったとき、包容力、すなわち、相手から学び取って自分を成長させていく。どうなるかといったら、あの人は自分のことをちゃんとわかってくれてる。しかも、自分の考えを取り入れてくれてる。そして、自分よりも成長していってしまった。この人に付いていこうという、そういう流れができるんですよ。それが具体的な包容力というね、能力のつくり方なんですよ。そういう力ができてくるとね、違う考え方なんやけどね、だけど、あの人は自分のことをちゃんと知ってくれてると。しかも、自分の考えを取り入れてくれてる。しかも、自分よりも素晴らしい考え方になっちゃった。この人に付いていこう。そういう気構えができていくんですね。それがいわゆる、違った立場や考え方なのに、多くの人間が自分の懐に飛び込んできて、そして、付いてくるというね、そういう状況をつくる方法なんですね。それが包容力が大きいとかね、人間性が豊かであるという、そういう状態なんですよ。それでようやく、対立を乗り越えてね、そして、違った考え方や立場の人間と、対立をしないで自分がみんなをまとめていくというね、そういう力ができてくるということですね。**

**だけども、まだね、包容力では、まだ本当の現実に対応しきれない。なぜかといったら、包容力というのは、まだ自分が中心にあって、多くの人間を平面的な関係でね、求心力的にまとめていくという、そういう力なんですよ。だけど、現実の社会は３次元という構造を持った立体なんだ。平面という２次元的な構造を持ったね、包容力じゃ、まだ本当の現実に対応できない。本当の現実に対応していこうと思ったら、人間は最終的に対立を乗り越える実力、俺が出ていったらどんな問題でもなんとかできる、なんとかさばけるというね、そういうどんな対立の関係でも、どんな問題でも、俺が出ていったらなんとかなるという、そういう自信というものをね、自分が持とうと思ったら、包容力のもっと上を求めていかなあかん。じゃあ、包容力に勝る対決を乗り越える力、包容力よりもっと大きな力はなんなのかといったら、それは統率力だ。統率力というのを持たないと、３次元という構造を持ったね、これ、立体的な構造を持った社会の問題に対応しきれないんですね。**

**じゃあ、包容力というものを越えて、統率力という力で現実の問題を処理していこうと思ったら、どういうことをするか。統率するためには、地位が必要なんですよね。平社員じゃ統率できない。だから、統率力という、そういう、能力をつくっていこうと思ったら、地位を追求するという、そういう欲望を持たなければならない。平社員から係長、係長から課長、部長、常務、専務、そういうふうにずっと自分が地位を追求するというね、努力をすると、統率力というものがかたちになってくるわけですよ。いわゆる地位が人をつくるっていう構造で人間は成長し始めるんですよ。それがまず、統率という、そういう基本的な力を、そういう基本的な実力をつくっていくための、まずは第1段階だ。だけども、地位はあっても、なかなか人が付いてきてくれへんっちゅうて、悩んでる方も随分いらっしゃるんですよね。地位はあっても、なんで人が付いてこんのか。それは人間力というところに問題がある。人間力に。**

**じゃあ、人間力とはなんなのかというと、人間力というものには２種類あって、内的人間力と外的人間力という両面があるんですね。統率力というものをつくっていくために必要な人間力は外的人間力である。内的人間力と外的人間力はどう違うのかと申しますと、内的人間力というのは、これは人間が内面に持っておる力ですから、５つあってね、人間は、これは理性、感性、肉体という、３つからできてますから、まずは内的人間力は、理性に対応する知力、感性に対応する気力、それから肉体に対応する体力、それからもう２つは、意志の力、愛の力。これは内的人間力ですよ。外的人間力はなんなのかといったら、外的人間力というのは、人類が長い歴史の中で社会に向かって表現してきた人間力。人類の長い歴史の中で社会に対して表現してきた人間力を外的人間力という。外的人間力にも５つの内容がある。それはなんなのかといったら、政治力と経済力と教育力と文化力と軍事力である。この５つがなかったならば、統率はできない。統率という、この統率という、そういう対立を乗り越えていく力をつくっていこうと思ったならば、政治力を磨き、経済力を磨き、そして、教育力を磨き、文化力を磨き、軍事力を磨いていかないと、統率という力を現実に及ぼすことはできません。**

**政治力というのはなんなのかといったら、政治力というのは、言葉の魅力を持って、俺の一言で何人が動くかというのが政治力なんですよ。まあ、それは具体的には権力ということになるわけですけど、権力の力というのは、これは金の力でもない。権力の力、政治力における権力というのは、これは自分の一言で何人が動くかという、そういう力ですよ。言葉の魅力ですね。カリスマ性ですね。そういう能力を磨いていく。これは言葉というのは人を動かすためにあるわけですから、だから、人が動かないような言葉は魂がない。言霊といって、言葉に魂がこもれば、人間は動くんだ。そういう魂のこもった、魅力のある言葉をどう使いこなすか。そこに政治力の、非常に大きなポイントがある。これは日本の政治家は、あんまりそういう努力をやってないんですけど、ヨーロッパとか、あるいは、アメリカの大統領はね、まさに演説は国民の心を鼓舞するというね、そういう、聞いとったらわくわくする。心が活性化されるって、そういう言葉を吐くんですよね。そのことによって、選挙民を、誘導していくということをするわけですよ。言葉に魅力があるかどうか。それが統率力をつくっていくための政治力だ。**

**経済力というのは、これは金があるぞというんじゃないんですよね。経済力の本質はね、現在の社会における経済システムを熟知しておって、その経済システムを使いこなせる力が経済力なんですよ。金はあってもね、それは結果であって、経済力とは違う。経済力というのは、経済システムを熟知しておって、経済システムを自分が使いこなせるというのが本当の経済力。だから、株が上がらんともうからんというのは、これは経済力がないんですよ。株はこれ、ヘッジ効果でね、つくられた経済ですから、株というのは上がっても下がっても、もうかるようにできてるんですよ。株が下がったら損をするというのは、そういう人間は、これは経済力がないんですよね。上がっても下がっても得をするという力をつくっていくのがね、経済力である。どんなことがあったって、俺はびくともせんという経済力はそういう経済力だ。経済システムを使いこなさないとね、経済力ではない。**

**教育力というのは、これはいわゆる師弟の関係というね、そういう師弟の関係という関係で、人間を引っ張っていくというね、そういう力ですよね。教育力というのは影響力ですよね。会社ならば、自分の子飼いの部下をつくる。自分の子飼いの弟子をつくる。そういう構造で、他人が付いてくるという、そういうこの力を持つのが教育力という人間力ですね。文化力というのは、これはなんなのかといったら、社長さんは仕事もできるけども、ギターを弾かせてもなかなかのもんだとかね。絵を描いてもなかなかのもんだとか、仕事以外に何か文化力という面で、素人はだしというか、玄人のような、そういう能力を持っておってね、その文化力において、多くの人間を引き付けてしまうという魅力が文化力という意味での外的人間力ですね。**

**これ、なんで文化力が、統率力に大事なのかといったら、あの豊臣秀吉がなんで茶道というものをね、政治というか、治政に取り入れることなしには政治ができなかったのか。豊臣秀吉は、軍事力と政治力と経済力においては、もう誰もかなわないという地位は築いた。だけど、なかなか諸侯がね、信服しないと。何かこの機があったら逆らってやるぞという、そういうふうな感じのね、気構えが残っておると。どうしたら、この信服という、心のつながりというのをどうしたらつくれるのかということを考えたんですよね。そうしないと、本当に安心して死んでいけないと。本当の平和はつくれない。どうしたら信服という関係性ができるのか。そのために秀吉が、使ったのが茶道を取り入れるという、そういう政治だったと。これは室町時代から、茶道というのは仏社会の中に広がっていった文化である。その茶道の頂点に千利休が立っておる。千利休を登用して、自分は千利休から直接習ってるんだというね、そういう師弟の関係を千利休と自分の間につくって、その先生である千利休すら、自分の膝元にひれ伏すんだというね、そういう姿を諸侯に見せることによってね、茶道という文化を取り入れながら、その諸侯の信服を自分で勝ち取ろうと思ったんですよね。**

**だけど、残念ながら、秀吉は、生来のそこつ者というか、あんまり文化的な教養を積んでこなかったもんですから、だから、茶道を取り入れた結果ね、なんか金ぴかの茶室をつくってしまったりして、本当のわび茶というね、茶の簡素の美学であるわび茶の精神と逆行してね、金ぴかの、キンキラキンの茶室をつくってしまったりしたもんですから、諸侯にばかにされてしまったりして、おかしいやないかということになってきたりして、結局は茶道を取り入れながらもね、かえって諸侯の反感を買ってしまったみたいなことになってしまって、結果としては、うまくいかなかったんですけども、だけども、文化力というのは、社長さんは仕事もできるけども、絵を描かせてもなかなかなもんだ。ギターを弾かせてもなかなかなもんだっていう力を持つと、なんとなく社員から尊敬されたり、また親しみを感じてもらったりという人間的な温かみというか、そういうものが出てくるんですよね。とにかくは、経営者といえども、あるいは、何かしら、上司といえども、そういう文化力の面において何かしら、一目置かれるものを持つということはね、非常に組織というものを引っ張っていくためには大事なこれ、要素なんですね。**

**とにかく統率力というものをつくっていこうと思ったら、政治力と経済力と教育力と文化力と、最終的に軍事力ですね。軍事力というのは、これは日本には軍隊がないといわれてますけど、一応、自衛隊があって、警察があって、何かしら、個々人がね、自分の身を守ると。外敵から自分の身を守るっていう力を持ってないと、社会はやっていけない。だから、個々人はピストルを持ってないけども、一応、警察官がピストルを持っておったりして、一応、個々人の軍事力の代わりをしてもらってるんですよね。だけど、やっぱり、実際には、会社には総会屋さんとか、いろいろその会社の利益をむさぼっていこうという人間もおりますから、それを守る力をね、やっぱり、会社は持ってないといかん。そのためには、ある程度、軍事力というわけではないけども、そういう力を行使するというね、そういう力も、やっぱり、現実にはまだまだなくすことはできない。しかも、悪というのは永遠になくなりませんからね。石川五右衛門さんが言ってるように、「浜の真砂は尽きるとも、世に盗人の種は尽きまじ」と言って、永遠に悪はなくならないというのがもう原則で、善があったら悪があるというのは常識ですから、だから、悪にどう対応するかということは十分にいつも考えていなければ、人生は全うできないという、そういうことになります。**

**その意味で、本当にわれわれが対立を乗り越える実力というものをね、３次元という構造を持った現実社会の中で成長させていこうと思ったならば、最終的には統率力というところまで、自分の能力を鍛えていかにゃいかんということになるわけですよ。だけど、まず基本はね、まず基本は、感情的対立を乗り越える実力をつくる。そのためには、対立をどう解釈するかというところから始まるんだ。そこから始まって、器の大きさをつくり、その次に度量の大きさをつくり、その上に包容力の大きさをつくり、その上に統率力の大きさをつくっている。順序がね、力の成長には大事であります。そういう方法で、われわれは愛の実力というものをかたちにするわけですよね。統率力も愛なんですよ、これはね。統率する力を持つことによって、あらゆる問題をさばくんですから、それは人々に安心と平安と、そういう、安心して生きていくことができるような、そういう状態をつくってあげるというね、そういう愛の力であります。それが３番目です。**

**次、４番目。４番目の悪化した人間関係を修復する実力というのは何かといったら、４番目は問題解決能力。問題解決能力をつくると。問題解決能力といっても、対立も問題なんですけども、だけども、いろんな問題があって、悩みとかね、苦しみとか、いろんな問題というのが社会にはあるわけで、経営の問題もある、人生の問題もある、夫婦や子どもの問題もある。いろんな問題をどう解決するか。それもやっぱり、対立を乗り越える実力の中では大事な、要素になってきます。で、問題を乗り越えるためには、問題とはなんなのかということをまずちゃんと知っとらないかんと。問題というのはなんで出てくるんですか。これ、みんな問題は嫌やなと思うんですよね。だけども、問題はなんで出てくるのかといったら、問題がなかったら成長はない。問題もない、悩みもないっていう状況というのは、これはなんなのかといったらね、現在、自分の持ってる力でほとんどできてる。だから、問題はない。悩みもない。だけど、そういう状況じゃ、人間は成長しないんだ。だから、問題はなんで出てくるんですかといったら、これは、人間を苦しめるために出てくるんじゃなくって、問題というのは、ただ一つ、人間を成長させるためのみ出てくるんですよ。問題が出てこないとね、新しい潜在能力、出てきませんしね、悩みが出てこないと、新しい気付きを持って人間性は成長しない。**

**人間の成長というのは、これは能力における成長と人間性における成長と、両面を持ってるんですよね。能力の成長は潜在能力の顕現である。人間性の成長というのは新しい気付きの積み重ねなんだ。人間性は教育によって成長するんじゃない。その本人が、ああ、そうだ、ああ、そうなのかと、本人が気付かないと、人間性は成長しないんですよ。じゃあ、どうすれば、潜在能力を顕現させることができるのか。どうすれば、新しい気付きを与えることができるのか。そのためには、問題がなければならない。悩みがなければならない。問題のない、悩みのない人生には成長はないんだと。だから、なんで問題や悩みが出てくるの。それは人間を成長させるためだけなんだ。しかも、問題というのは、感性が感じなかったら出てこない。感性が問題を感じるとね、そのことによって理性はどうしようかと考えるんですよ。そういう方法で人間は成長できるようになってるんですね。**

**問題はあってもね、感性が感じなかったら問題はないんですよね。だから、感性の鈍い人は、問題があっても問題を感じないもんですから、問題はないんだと思って平気でやってるんですけど、そういう人は感性が鈍いから大問題になってからしか問題だって言わないんですよね。もう大問題になって、もうどうしようもなくなってから問題だと言ったって、もうどうしようもないんですから、もうこれはどうしようもないんですよね。だから、どうしようもなくなる前にね、問題を感じて、早期発見、早期治療で乗り越えていかにゃいかんということですよ。そのために感性が大事なんだ。感性は問題を感じる能力である。感性が問題を感じなかったら、あっても出てこない。感性の鈍い経営者は問題に気付かないからね、会社を大変な状態にしてしまう。みんな不幸だ。問題を感じる感性も愛なんですよ、結局はね。原理的には。とにかく感性は愛を感じ、感謝を感じ、恩を感じ、意味を感じ、価値を感じ、問題を感じ、感性から勇気が湧いてくる、欲求が湧いてくる、興味や関心が湧いてくる。もうそういう感性というものを磨いていかないとね、現実に何かしら、現実をよりよい方向性に持っていく。そういう力は出てこないんですよね。**

**理性だけじゃ、合理化だけじゃね、人間は干上がってしまう。やっぱり、仕事をするんでも、理性で義務と責任感でやってるのとね、仕事にほれて、好きでやってるのと全然これ、仕事の結果、違いますからね。もちろん、義務と責任感でやる仕事も大事ですけど、それ以上の仕事をしようと思ったら、ほれないかんと。感性が大事だと。意味と価値を感じないかんと。意味と価値を感じれば、義務と責任感でやってる以上の仕事ができてくる。それが自分の成長ですからね。問題を感じなかったら成長はない。とにかく、問題というのはなんで出てくるんですか。それは自分を成長させるためにだけ出てきてくれるんだと。だから、今、自分がやってる仕事から出てくる問題というのは、いったいなんなのかといったらね、こういう問題を、こういう悩みを乗り越えていく力をつくっていかんと、君は道では絶対、成功できる人間になりませんよということを教えるために出てくるのが、今、自分がやってる仕事から出てくる問題、悩みなんですよ。どういう能力をつくっていったならばね、どういうことに気付いたならば、君は道で成功できるのかを教えてくれるために出てくるのが、今、自分が歩いてる道から出てくる問題、悩みの意味なんですよね。**

**今、自分が歩いてる道から出てくる問題と悩みを乗り越えたらね、その人間はその道で成功できる。だから、成功した人というのは、今、自分が歩いてる道から出てくる問題を乗り越えた人が成功した人なんですよ。今、自分が歩いてる道から出てくる問題を乗り越えなかった人は、その道では成功できなかった人なんですよ。それだけの話なの。だけど、理性で考えてしまうとね、理性で考えてしまうと、問題が出てくるとね、問題が出てくると、俺は間違ってたんかなと思うんですよね。上手に道を選択したらね、問題が出てこない道があるはずなんだと思うんですよ。結婚でもね、結婚でも、上手に相手を選んだら、全然、夫婦げんかせんとね、なんの問題もないような幸せな結婚生活ができるかもしらんと思ってしまったりするのが、それが理性によって、人生を考える人間のタイプなんですよ。だけど、人生というのはね、どんな人と結婚してもね、問題の出てこない道はない。悩みのない道はない。苦労のない人生なんてないんですよ。誰と結婚したって必ずね、問題と悩みと苦しみは出てくるんですよ。苦しみのない人生はない。悩みのない人生はない。だから、本当にわれわれはね、人生を生き抜いていく力をつくっていこうと思ったら、問題のない人生を望んではならない。悩みのない人生を望んではならない。誰と結婚しても、どんな道を歩いても、必ず問題、悩みが出てくるんだ。なぜならば、人間が成長するためには、問題、悩みがなければならないのであって、人間にはみんな、現在、自分の持ってる力の限界がある。**

**だから、現在、自分の持ってる力の限界に到達すればね、やりたいことができないという、そういうことにぶつかるんですよ。悩みや問題にぶつかるようにできてるんですよね。それを乗り越えていって、人間は能力も成長し、人間性も成長して、より素晴らしい、より豊かな人生をつくっていけることになるんですね。だから、幸せを求める限りね、人生には悩みがある。問題がある。悩みのない人生を望んではならない。問題のない人生を望んではならない。誰と結婚しても、必ず、その人と結婚しなければ出てこないような悩みと問題は出てくるようになってるんですよ。だけど、理性で考えてしまうとね、上手に相手を選んだならば、上手に道を選択したならば、上手に決断したならば、まったく問題が出てこないような、素晴らしい道があるはずなんだと思ってしまうんですね。それが実は人生の迷いなんだ。人間は完全無欠のロックンローラーじゃないんだ。人間皆、不完全なの。人間も不完全だし、現実も不完全なの。不完全ということは問題があるんだ。問題のない現実はない。だけど、間違った経営者はね、問題がなかったら、何もせんでもええと。問題があったらどうするか考えたらいいんで、問題がなかったら何もせんでもいいんだ。問題がなかったら、問題はないんだから、問題はないじゃないかなんていうようなことを言って、安閑としてる。それは現実が見えてないんだ。問題のない現実はないんだ。常に問題はあるんだ。経営するということは、常に現実をよりよい方向性に変化させる。そういうことを毎日、毎日やってなかったらね、本当の経営ではない。変化させるということが、生きてるという実証をつくることで、変化しなくなったら死んでるんですからね、生命であったならば。**

**だから、会社でも、こうやって素晴らしい新社屋を建てる。変化させるということがね、社員を活性化させ、またその業態を稼がさせていく机上な原理だ。ずっと古いね、社屋のまんまじゃね、労働意欲も減退しますしね、なんとなくこう、うっとうしくなってくる。上がってこう、目が覚めるようなね、こんな部屋で、こんな話を聞けたり、また目が覚めるような部屋で、仕事をさせてもらえる。そういう変化がね、なんとなく気持ちを活性化させて、うきうきさせて、何かしらやろうかなという気分に、させてくれるんですよね。変化が大事だ、人生には。変化しないことは死んでるんだ。変化しない環境は人間を殺すんですよ。だから、全然、変化がなくなってしまうと、退屈でね、退屈で退屈でしょうがなくなりますよ。変化があるから、なんとなく、気持ちが、活性化するんですよね。変化ほど大事なものはない。とにかく、問題のない現実はないんですよ。どういう人間にも必ず問題はある。問題がないと思うのは、それはめくらなんだ。見えてないんだ。人間も不完全、現実も不完全、あらゆるものも不完全。不完全だから進歩するんですからね。必ず問題はある。問題がないと思ったら、もうその瞬間、自分は現実は見えてないんだ。会社にも、人間にも、人生にも、常に問題があるんだということをね、忘れてはならない。**

**それは、なんでかといったら、人間を成長させるためだ、変化させるためだ。変化を誘発させるために問題が出てくるんだ。変化がなかったら、退屈なんだ、かったるい、やる気になんない。とにかく問題というのは、自分を成長させるためにだけ出てきてくれてるんだというね、その解釈をね、忘れてはならない。自分を成長させるために出てきてくれてる問題を避けてどうするんだ。逃げてどうするんだ。それに立ち向かっていくということが大事だと。問題から逃げない。問題に向かっていくという、向かっていくという気構えが人生ですからね。それが生きることだ。逃げるということは、自分の人生を捨てることだ。問題から逃げるということは、自分の人生を諦めること。諦めることだ。なぜかといえば、今、自分が歩いとる道から出てくる問題と悩みは、自分を成長させるためにどういう能力をつくったならばね、どういうことに気付いたら、君はこの道で成功できるのか。このことに気付けよといって、出てきてくれてるのが問題、悩みですからね。そこを避けて通ったんじゃ、もうそれは負けの人生だ。逃げの人生だ。自分の人生、捨てたんだ。どっかで問題を越えないと前進できないんです、絶対にこれはね。問題を越えるから、成功の道がつくられるのであってね、あらゆる問題から逃げておったらね、自分も成長しない。自分が成長しないということは、歴史の要請に応えられなくなってしまうんですよ。**

**問題というのは、常に歴史の要請ですからね。会社というのは、消費者の要望に応えて、歴史の要請に応え続けなければ発展しない。消費者の要望とか、歴史の要求というのが問題として出てくるんですからね。クレームとかね。こういうことができんかって、問題を投げ掛けられるのが消費者の要求であり、歴史の要請ですから、それに応え続けるっきゃ、会社を発展させる方法はないわけですよね。とにかく問題、悩みは、自分を成長させるために出てきてくれてるんだ。逃げてどうするんだ。そのことを、まず知ってないといかん。問題がないことを望んではならない。理性で考えると、問題の出てこない道があるはずなんだ。理性は人間に完全性を求めますからね、理性で考えると、問題のない道があるはずなんだと思ってしまうんですよね。自分が今、歩いておる道から問題が出てくるとね、この道を選んだから、こんな問題が出てきたのであって、ほかの道を選んでおったら、こんな問題は出てこなかったかもしれないという人生の迷い道に入るんですよね。それが人生の迷いというんですよ。**

**この決断をしたからね、こんな問題が出てきたんだ。この人と結婚したから、こんな問題が出てきたんだ。あちらの人と結婚しておったならば、こんな問題は出てこなかったかもしれない。それは迷いなんですよ。この人と結婚したから、こんな問題が出てきちゃったんだと思ったらね、もう自分は不幸になってしまうんですよ。しかも、今、自分が結婚してるその人に対して、自分の全情熱を傾けるということができなくなってしまう。ひょっとしたら、あちらの人のほうがよかったんじゃないかなと思った瞬間にね、もう自分の関心を分散しますからね。だから、自分が選んだその人に、自分の全情熱を傾けられなくなってしまう。だから、相手にも不満を与えてしまって、相手も不幸にする。自分も不幸だ。また、自分があるものに対して集中力を発揮してね、全情熱を傾けないから、集中力がなくなってしまう。集中力がなくなってしまったら、自分の底力、出てこない。自分の底力が出てこないから、どんなことをやっても全部、半端になってしまう。結局は、迷いの人生、半端の人生だ。ひょっとしたらと思った瞬間に自分が不幸になってしまう。相手をも不幸にして、相手にも十分な満足を与えてあげられない。結局、人生はね、今、自分が選んだ道から出てくる問題を乗り越えるっきゃないんですよ、もうね。迷ったらいかん。ひょっとしたらと思った、その思いが自分を不幸にするわけですよ、確実に。人生は、今、自分が選んだ道から出てくる問題を乗り越えるしかないんですよ。それが人生だ。**

**極端なことを言うならばね、どの道を選ぶか、誰と結婚するかが大事なんじゃない。自分が十分に考えて、これでいこうと思った、その道から出てくる問題を乗り越えることが人生なんだ。人生にね、何かしら、この道でいこうという決断をするためにはね、十分に考えて、そして、この道でいこうと決めなあかん。でないと、その道に懸けるとか、情熱を傾けることができませんからね。だから、決断するときには十分に考えないかん。だけど、選んだからには、迷ったらいかん。どの道を選んでも同じなんです、もうあとはね。だけど、懸けるためにはというか、その選んだものに情熱を懸けきっていくためには、十分に考えてね、これでいこうと決めないと情熱を懸けられませんからね。なんでもええんや、誰と結婚してもええんやと思ったら、これは情熱が出てきませんからね。この人というものを決めないと、情熱は注ぎ込めない。そのためには、やっぱり、考えないかん。だけども、選んだからには、もうそれに懸けきっていくことが人生だ。そこから出てくる問題を乗り越え続けることが人生だ。迷ったらいかん。迷ったら自分を不幸にする。**

**だから、問題というものに対応するためには、何が大事なのかといったら、ある道を自分が選んだならばね、そのとき、自分が選び取らなかったものの中にどんなに捨てがたいね、素晴らしいものがあったとしても、あるものを選んでしまったならば、他の可能性は全部捨てきるという、この捨てる勇気がね、人間に幸せな人生を与えてくれるんですよ。捨てきれないと不幸になるんですよ。捨てきれないとね、なんかあると、常に、ひょっとしたら、あちらのほうがという思いが出てくるんですね。それが自分を不幸にするんですよ。幸せになりたいと思ったら、人生を懸けないかん。今、自分が選んだその道にね、自分の全情熱を注ぎ込むということをして、初めて自分も納得できる人生、それが幸せの人生。相手にも十分な満足を与えてあげることができる。それが幸せな人生のつくり方なんですよね。そのためにわれわれは、出てくる問題を乗り越え続けるっきゃないんですよ。迷ったらいかん。問題は自分を成長させるために出てくるんだ。人生は出てくる問題を乗り越え続けることが人生、逃げたらいかん。とにかく問題というのは、自分を成長させるためにだけ出てくるんだ。そのことをね、忘れると、自分は不幸になります。問題から逃げたら、それは自分の人生を捨てることだ。**

**逃げたらいかんちゅうたって、逃げへんぜって言って、突っ立っておっただけじゃ、張り倒されてしまったら一巻の終わりですからね。大事なのは逃げんと何をするかですよ、次はね。だけど、何をするかの前に、なんで逃げたらいかんのか。逃げたいと思ったらね、今、自分の置かれてる状況が浅くしか見えないんですよ。深く読み取れないんですよ。誰かに助けてもらいたいと思ったらね、もう自分の底力、出てきませんからね、問題を乗り越えられないんですよ。依頼心があったらね、自分の能力は出てこないんですよ。誰にも助けてもらわん。俺一人の力でなんとかやっていく。すなわち、自分が決断した道から出てくる問題はね、誰かに助けてもらうというわけにいかんのだ。俺がやらな、誰がやるんだっていう問題なんだ。どんな問題が出てきたってね、自分が選んだ道から出てくる問題は、俺に任せておけと。俺がなんとかしたるといって乗り越えていかないかん問題だ。これは女性もそうですよ。女性も結婚したからにはね、どんな問題が出てきたって、私がなんとかしたる。私に任せておいてって、やっていかないかん問題だ。これは夫婦ともそう。そこから逃げたら、自分が不幸になるだけのこと。向かっていってこそ、自分が幸せになる力。自分で自分の幸せをつくっていく力というのは、そうしてつくるんですからね。**

**とにかくは、出てくる問題を乗り越えていかないと、実力はできませんからね。どうしたら乗り越えられるのかといったら、どんな問題でもね、どんな悩みでも、どんな問題でも、どんな苦しみでも、問題を乗り越える力をつくるためにはどうするかといったら、もしこの悩みを他人から相談されたら、自分はその人にどうアドバイスしただろうかというふうに持っていかないとね、正しい回答が出ないんですよ。悩みながら考えるとね、八方ふさがりになるんですよ。例えばの話がね、その深い森の中に迷い込んでしまったとする。深い森の中に迷い込んでしまって、迷ってる状態で、どちらのほうに進んでいったら、この森から早く出られるかなと思ったって、結論は出ないです、絶対これは。どうしたらね、その森から一番早く出られる道筋がわかるのかといったらね、その森の中に入っておる一番高い木のてっぺんに登って、一番高い木のてっぺんから森全体を外から眺めたらね、そこにおるんやったら、こう行ったらすぐ出られるやないかと、すぐ回答が出るわけですよ。**

**だから、理性で回答を出すためにはね、迷いながら考えたらいかんのですよ。その悩みを他人から相談されたら、俺はその人にどうアドバイスしてやるだろうかと考えたら、必ずこうしてみたらどうやって答えが出るんですよ。名案が出るんですよ。だけど、悩みながら考えるとね、どう考えてもね、こうすると、あいつに迷惑が掛かってしまうしな、こうしたら隠しておきたいことがわかってしまうしな、こうしたらこうなるしなでね、全部、都合の悪いことが出てくるんですよ。もう最終的に俺が死ぬっきゃないかっていうことになってしまったりするわけですよ。自分で考えたらね、もう俺が死ぬっきゃないかっていう場合でもね、他人ごとならね、じゃあ、死ねよとは言えませんからね。もう俺は死ぬっきゃないんやと、もう死のうと思ってるんやといってもね、まあ、待てよと。死ぬ気になったら、なんでもできるやないかというのが他人ごとなんですよ。他人ごとだったら、まあ、待てよと言える。自分で考えたら、もう死ぬっきゃないと思う。この落差がね、このゆとりが問題を、問題の出口を発見させてくれるんですよ。**

**どんな問題でも、とにかくは、子どもの問題でも、仕事の問題でもね、人間関係の問題でも、夫婦の問題でも、とにかくは、何か問題や悩みを持ったら、必ずどうするかといったら、他人からそれを相談されたら、俺はその人にどう言ってやるだろうかといったらね、だいたい二十歳以上の人間だったらね、他人にだったら、俺はこう言うっていう答えがすぐ出るんですよ。他人だったら、他人ごとだったら、俺はこう言ってやるだろう。そのことを自分がやったら助かるんですよ。人間が追い詰められるのはね、人間が追い詰められるのは、これだけは絶対、知られたくない。これだけは絶対、話したくない。それがあるから、どんどん、どんどん、追い詰められていってね、ついには、もう逃げ場のないところまでいってしまって、結局もう、俺が死ぬっきゃないかになってしまうんですよ。他人ごとだったらね、すぐそんな自分の主観的な思いはないからね、他人ごとだったら、こうしろよと言ってられるんですよ。**

**だから、週刊誌に載ってる芸能人の問題でもね、芸能人本人はものすごい悩んでんですよね。そのやってはならんことをやってしまったりしてるんですけど、それを井戸端会議でね、週刊誌を読んでる奥さん方はね、そんなことはこうしたらいいんだよねって、すぐ簡単に結論を出してしまって、それが正しいんですよ。だけど、本人はね、悩みきってしまって、神経衰弱になって、入院してしまったりして、病気になっちゃうんですよね。だから、第三者はね、そんなことはこうしたらいいんだよねって言って、すぐ結論を出してんですよね。それは他人ごとだからね、正しい回答が出せるんですよ。この方法論を忘れたらね、結局、自分で自分の人生を閉じてしまうんですね。答えが出てこない人生になってしまう。とにかく問題解決能力をつくるためにはね、問題は自分を成長させるために出てくるんで、逃げたらいかん。じゃあ、逃げんとどうするのか。他人から相談されたら、俺はその人にどう言ってやるだろうかと考えたら、名案が出る。その方程式をね、絶対、忘れたらいかん。**

**経営者でもね、ついつい悩んでしまうと、経営コンサルタントを呼んでくるんですよね。自分で自分の問題に悩むからね、他人に相談せんといけんことになるんですよ。経営コンサルタントは外から来ますからね、自分の問題じゃないからね、会社に入ってきたら、すぐ問題の原因がわかってしまうんですよ。こうしなさいといって。べつにそんな優秀な経営コンサルタントじゃないのにね、すぐ問題解決できてしまうんですよ。他人ごとだからですよ。自分の問題になるとわからなくなるんですよね。だから、夫婦げんかというのは、犬も食わないと申しますけど、犬も食わないような問題でね、夫婦はもうしゃかりきになって、けんかしてるんですよね。もう本当、殺したろうかてなことやってるんですけども、他人から見たら、何ばかなことやってんのということになってしまうんですよね。それほどにね、悩みの中に入ってしまうと、自分が見えなくなってしまうんですよ。他人ごとだったらね、すぐ本質が見えるんですよね。これはものすごく大きな違いです。それが４番目の問題解決能力をつくるということですね。**

**最後の５番目ですね。最後の５番目の問題は、これはもう本当に、対立の様相が深まっていってね、もうどうしようもないと。もう本当にもう、こんがらがって、こんがらがって、こんがらがってほいという状態になって、お手上げだということになってしまったらどうするかということですね。お手上げになったらね、もうこれはもう、作為を用いてはならない。もう本音も建前も全部ぶっちゃけてしまって、なんにも隠してるものはございませんというね、裸になるということがね、できるかどうかが最後の決め手なんですよね。もうゼロになる。全部、投げ出してしまうと。ゼロから出発するって、そういう腹ができてるかどうかですね。本音も建前も全部ぶっちゃけて、なんも隠してるものはないという状態にしてしまうと、かえってですね、出口が見えてくるという状態になるんですよね。**

**まあ、これは短歌にね、短歌に有名な短歌があって、「山川の末に流るるも身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」という短歌があって、「山川の末に流るる」というのは、これはドングリの実がね、山の奥からぽろんと落っこって、ほんで、せせらぎにこう流れ込むんですよね。実が入ってるもんですから、川の底をこう、岩にぶつかりながら流れてくるんですよ。どっかで大きな岩にぶつかったときに、その殻がはじけて、中の実が落っこちるんですよね。そうすると、実が浮かび上がるというね。「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」って、人間が捨て身になったときね、助かる道が開けてくるって、そういうことを、まあ、歌った歌なんですけども。とにかくは、「山川の末に流るるも身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」。これだけ後生大事だと思ってるものを持ってるから、沈みっぱなしで浮かび上がれない。出口が見えない。追い詰められてしまうと。それをぽんと捨ててしまったら、すっと助かって、気分が楽になってしまうんだ。そんなことができるかどうかということをね、平素からやっぱり、自分に問うてみないといかんと。**

**本当に追い詰められたときに裸一貫になれるか。全部、投げ出せるかということをね、自分に問うておいて、俺はいつからでも、ゼロから出発できるんだという、そういう腹をね、くくっておけるかどうか。これもやっぱり、その追い詰められてからなかなかそうはなりませんから、泥棒を捕まえてから縄をぬってるようじゃ、間に合いませんから。だから、平素からこうなったときにはこうするっていうね、そういうことを自分で考えておいて、そういう人生の危機管理ですね。国家にもやっぱり危機管理が大事ですけど、人生にも危機管理が大事だ。もし危機になったら、もしこういうことになったら、俺はどうするか。それを常に考えておくということも、まあ、人生のね、究極の問題として大事であります。もう追い詰められて、どうしようもなくなって、お手上げだということになったら、裸になるっきゃないと。そんなことができるかどうかということをね、自分にも問うて、それができる心準備をね、平素からしておいて、本当に追い詰められたらそれができるという、そういう覚悟をね、自分でつくっておくことも長い人生には大事な問題だ。**

**まあ、戦争中とか、戦国時代の中でも、それと類した言葉がつくられましてね、死を必すれば、必死になったら、「死を必すれば則ち生き、生をえば則ち死す」という言葉があってね、「死を必すれば」って、必死になったらね、必死になったら、「則ち生き」、すなわち生きる道が見えてくると。助かると。だけども、「生をえば」、俺だけ助かりたいと思って作為を弄するとね、かえってその作為ゆえに、自分がわなにはまってしまって、その作為、自分の作為で、かえって死んでしまうという、そういうことになってしまいやすいと。「死を必すれば則ち生き、生をえば則ち死す」って、自分だけが助かりたいというわがままなね、そういう自己中心的な思いを持ってしまうと、かえってそれがゆえにと、自分が死に追いやられてしまって、追い詰められてしまう。助かりたいと思うから、殺されてしまう。死んでもいいと思ったら、助けてくれるというね。そういう人間の心理もあるんだということですね。**

**よく昔の時代劇で、町人が武士から責められて、追い詰められてしまって、大道に座り込んで、どうにでもしろなんてなことを言って、座ってしまうと、どうにでもしろって言われると、なかなか切れないんですよね。逃げ出したら、バサッと切ってしまうところを、どうにでもしろと言われると、なかなかこう切れないというね、そういうことで放免されてしまうということがあったりすると。そういうことも人生にはあるかもしれませんからね。もうどうしようもないと追い詰められたときには、そういう真実への勇気。真実というのは、もうあらゆるものを全部出すというのは真実ですから、真実への勇気という対応法しかないと。その真実への勇気というのは、そういう本音も建前も全部ぶっちゃけるという真実の勇気と、もう１つはね、真実の中に感動がある。感動の中にしか真実はない。感動というのは、人間の心を揺さぶるんですよね。だから、本当に追い詰められたときには、相手を感動させる力を持ったならばね、助かる道が見えてくるかもしらんということはあるんですよ。感動するだけじゃ、まだ受け身であって、実力じゃない。相手を感動させる力をつくっていく。それが実力だ。真実は感動の中にある。感動の中にしか真実はない。感動させる力を持ったならば、人間は真実の力を持ち得るんだと。**

**それが自分を助けるんだということになれば、人を感動させるためにはどうするかということも平素から考えておかないかんと。そのためには、どうするかといったら、単にテレビを、面白いねって見てるだけじゃなくってね、もしこの場面で、主人公がどんなことを言ったら、俺は感動するだろうか。どんなことをしたら、俺は泣くだろうかと思ってね、客観的にそのテレビを見ながら、感動というものをどうしたらつくれるのかというようなことをこう、平素から考えてるんですよね。そうすると、そういう状況に自分が陥ったときにそれができるというね、そういう心準備ができてきます。感動をつくりだす方法、どうしたら俺は泣くだろうか。どうしたら俺は感動するだろうか。そのことをね、テレビという、そういう客観的な場面で見ながら、どういうふうに言ったら、俺は感動するか。どうしたら俺は泣くだろうか。そんなことをこう、思いながらテレビを見るということも、自分が人を感動させる力というものを、つくっていくことへの方法論であります。とにかく真実は感動の中にある。感動の中にしか真実はない。感動というのは感性ですからね。理屈を越えないと感動は出てこないんですよ。**

**だから、うそを言った人間に、うそを言っちゃ駄目じゃないかというので、感動じゃないですからね。だけど、うそを言った人間を、かわいそうになと思って、ごめんね、許してねって言ったら、うわっと泣いてしまうんですよね。それが感動だ。真実というのは矛盾を内包するんですね。理屈じゃ感動できないんですよ、人間は。理屈を越えないと感動しない。そういう感動させる力。矛盾を内包したね、矛盾を内包した現実というものを自分の命に対するというか、そういう力をつくっていかないと、人を感動させるという言動を発せられない。それも難しいようだけどね、だけど、その気になったらね、しようと思ったらそんな難しいことじゃないんですよ。ただ、やっぱり、飛び込みセールスと一緒で、ちょっと勇気を出さないとやれないんだけども、ちょっと勇気があったらできてしまうことなんですよね。ぜひそんなこともね、考えてみて、もし本当に自分が窮地に立たされて追い込まれたら、俺はどうするかなっていうことをね、考えてみるということも人生の中のどこかの場面でね、何回か持ってもらいたいと。テレビを見ながら、ああいう状態になったら、俺はどうするかなと思うこともね、大事なんですね。他人がどうするかなじゃなくて、俺はどうするかなと思ったらね、俺ならこうするかな、こんなことができたらな、そういうね、勇気を、映画を見ながら、またドラマを見ながら、自分のものにしていく。それも人生勉強ですからね。**

**とにかく、この愛の実力、最も高度なね、愛の実力というものをつくっていこうと思ったならば、われわれは、そういう悪化した人間関係を修復するというほどの、理性によってつくりだされたいろんな問題を愛の力によって解決していく。理屈を越えた愛の力というのをどうつくっていくか。これはものすごく大事な、自分の人生を素晴らしいものにしていくための大事なこれは原理であります。ですから、ぜひもういっぺん、申し上げたこと等を、いろいろこう、考えてみて、自分なりに、自分ならどうするかということをぜひ、もういっぺん、振り返ってみてもらいたいと思います。一応これで、今日の悪化した人間関係を修復する実力は終わるんですけども、来年も、先ほど社長さんとお話をさせていただいて、来年もまたこの講座を続けていただくということになりましたので、来年のしょっぱなは、人間にとって真実の愛とはなんなのかというね、真実の愛ということについてお話をさせていただいて、本当にわれわれが、自分の人生を素晴らしいものにしていく、そういう愛の力の最終的な締めくくりを、まず来年の初めにはさせてもらいたいと思っております。そのあとは、人間性を磨くというか、人格の高さをつくる、深さをつくる、大きさをつくる。そういう問題について、お話をさせていただきながら、また皆さん方と勉強を共にしたいと思います。どうもありがとうございました。**